勇者の勇者による勇者のための

白金千乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者の勇者による勇者のための

【Ｎコード】
Ｎ８８１９Ｕ

【作者名】
白金千乃

【あらすじ】
この物語は、
剣と魔法と最新機器の世界で、
悪役のような高笑いをする勇者（主人公）と、
死んだ魚のような目をした少女（ヒロイン？）が、
家賃を滞納しながらお送りしております。

＊作者サイト　Ｐｔ．７８（ｈｔｔｐ：／／ｍｕｕ．ｉｎ／ｃｈｉｎｏ／）　にも掲載しています

登場人物

カンラ
勇者だがその行動には”悪役”という言葉が似合うことが多い。
自分に甘く他人に厳しくがモットー。だが困っている人は助ける主義。

アルマ
死んだ魚の様な澄んだ目をしている魔術師。
さばさばしてるがお茶目な性格だが空気は読める。

兎
毒舌家で容赦が無いが自身もそこそこに不運。
騒がしいわけではないがよく叫ぶ。忘れられがちな回復役。

レーヴェ
白銀髪で布や飾りの多い服を着ている。
神出鬼没で人をからかうのが趣味。老人口調でしゃべる。

ノウラ
黒髪に黒い瞳、黒い服に身を包んでいる。
性格口調ともに丁寧だが好奇心が強い。迷子の達人。

アンジェリト
通称アン。アンジェと呼ばれるのは嫌らしい。
自他認める武器マニアであり、特に剣が好きで仕方が無い。

アリオス・シュトラウス
金髪碧眼の騎士団部隊長。冷静な性格。

ノウラのお隣さん。

ギィ

アリオス直属の部下の密偵。明るく飄々とした性格。

神出鬼没で、よく高い場所にいる。

設定（前書き）

用語や世界の設定説明。随時追加。

設定

［働人（ワーカー）］

様々な職業に属し、その職業に見合った仕事を請け負うもの。主にハロウによって仕事を割り振られるが、他機関に属するものもいる。

［魔術師］

魔女以外で魔術を使用することができ、また新たな魔術を創る者たち。

多くは働人として仕事を行うか、国や機関に属して魔術の研究を行う。

［機関］

それぞれの目的により結成され、その目的のために行動する組織。

国が運営するものから民間によるものまで多彩。

《ハロウ》

民間の中でも規模が大きい機関のひとつ。

他方から仕事を請け負い、働人に仕事を割り振る。

《十字の鉄槌（マレフィカルム）》

廃魔主義機関。その思想を説き、布教する活動と、魔の排除を行っている。

典型的な魔女批判組織。

［騎士団］

国に仕える存在であり、その使命は国を守ること。軍の役割を持つ。
幾つかの部隊が存在している。

［請負賊（コントラクター）］
”雇い主”によって命じられることで、その名の通り仕事を”請け負う”賊。
一般の賊と違い後ろ盾があるため騎士団が手を出せないことがある。
また、ハロウからしても簡単には捕まえられない厄介な存在。

［魔女］
生まれつき魔力を持つ種族で、魔術の使用に詠唱などを必要としない。
いまだなぞが多いが、魔術の開発や提供を行っている。

［魔賊（まぎ）］
魔女崇拝の組織。その目的は”魔女”そのもの。
各地で様々な騒ぎを起こすことも多く、機関としては認められていない。

［神羅（しんら）］
神獣を祭る集落。人目につかない隠れ里に住んでいる。
里特有の掟等があるが、時代に対応しつつある。
普段から鍛えており、武術を操る。”生身”の戦闘に強い。

［勇者］
遥か昔に世界を救い、その後も世界を守り続ける象徴。
……が、現在では忘れられつつある。というより覚えられていない。

”現在”の勇者はカンラ。

［魔剣］

最強の武器を創る目的で創られた最凶の武器。

研究所の事故により、その研究は”消滅”し、今や伝承の存在。

どうやら”鞘”も存在するらしい。

間借り勇者

「ふはははははっ！！俺に喧嘩を売ったのがお前らの過ちだあああ！！」

「……百歩譲っても良心的人間の台詞じゃないってそれ」

魔物を足蹴にして高笑いをする男に、女は輝きのない目線を送り呟いた。

日差しと風が混ざりながら頬を掠める、とある日のこと。

王国オルドール、その一角にある街の西。

街道を離れた場所にいるという少し大型の魔物。

「聞いていたより大きかったけど、まあ、問題なしと」

そういいながら、女は屈んであたりを見渡す。

めぼしいものが無いとわかると、やや顔をゆがめて起き上がる。

「……ち」
「アルマさーん、顔がひどいよ」
「カンラの横にいれば問題無し」
「え、それどういうこと？どういうこと？」
「さて。手配された魔物も倒したし、戻りましょうか」
「え、え……え？」

すたすたと歩いていくアルマの後ろを、カンラは寂しそうに追いかけた。

「では、少々お待ちください」
「よろしくおねがいします」

書類を記入して提出し、アルマは街場のソファにすわった。

国が運営する機関の一つ、”ハロウ”。
依頼を受けて紹介する、仲介業を主とする機関であり、多くの者が訪れる。

大きな被害を出す魔物の退治手配も、その一つ。

「今回はそこそこだったかな」

「それならまた暫くは大丈夫そうか？」
「……ええ」

「……」
「……」

「え、問題あるのか？」
「……今月は、あれがありますから」
「あれ？」

「これかな……」

アルマはそう言って耳をふさいで屈んだ。

「ぶほっ」

屈んだアルマの頭上を飛び越えて。
華麗に直線を描いた足は、カンラの頭に到達。
そしてそのまま、蹴り飛ばした。

「兎、よっす」
「よっすアルマ。馬鹿はどこ行った」
「君の下にいますけれどもー！？」

下からの叫び声に、兎はようやくどけるとずれた眼鏡をかけなおした。
見事なことに、周囲に被害は出ていない（下にいる人物を除

いて）。

「何すんだよコノヤロ！？」

「お前が何してくれてんだよ！？忘れたのか、馬鹿だから？！馬鹿だから！？」

大事なことなので二回言いつつ、兎はカンラの頬を引っ張る。

ついでに、カンラも兎の髪を引っ張っている。

ふと、思いついたようにカンラが叫ぶ。

「……ああ！？」

「やっぱり忘れてたのかよおおおお！」

本日二度目の蹴りを食らわせ、兎は叫んだ。

一応、周囲に実害は出ていない。

迷惑被害はともかく。

「この前の支払い期限日があるって言ったよな！何度も言ったよな！？」

「何で俺だけ！アルマは！？」

……

「ごめんごめん、うっかり☆」

「「死んだ魚のような目で可愛く言うな！」」

わざとらしいほどに効果音までつけながら言ったアルマの頭を、二人同時にはたいた。

「とにかく、さっきの報酬で何とかなりそう？」
「家賃はな」
「……それはつまり」
「生活費がない」

重い空気が周囲に漂った。
アルマが振り返り、そこにある掲示板を見る。

「仕事配分間違えた……あらかたの仕事はもう取られてるよ」
「あいつが戻れば何とかなるけど……まだまだだな、多分」

「……最終手段、しかないな」

神妙に口を開いたカンラに向き直り。
二人は次の言葉を待った。

「ごうと」

「とりあえず仕事が残ってないか探してみよう」
「それしかないか」

「ごめんなさい痛いもう言わないからどいてください痛い」

「なんじゃ、騒がしいのう」

「「うわあ！？」」
「……びっくりした」

突然近くに現れたその姿に、３人は驚き目を見張る。
それをみて、現れた人物はにやりと笑う。

「レーヴェ、せめて予告してからでてきてくださいよ」
「それじゃあ面白くないじゃろうが」
「お前がだろ！」
「まあまあ……せっかく仕事を持ってきたというに」
「マジでさすがレーヴェ」
「まじっすか」
「……とりあえず場所を移動しよう。”ここ”じゃ何だしの」

「ぜひおねがいします」

いまだアルマと兎の下にいるカンラは、震える声でそう告げた。

人探し

「家探し？」
（むごむごむごむご）

ストローを加えながら、カンラは肘を突いて尋ねた。
その隣では、アルマがケーキを無言でほおばっている。

「わしの知り合いが暫くここに住む事にしたらしくてな。そういうのはお前達の方が詳しいだろ」
「ああ、レーヴェは放浪してるから」
「アルマ、せめて旅してるといってくれんか」
（むごむごむご）

「でもさ、家探すくらい別に仕事にするほどでもないんじゃね？」
（むごむご）

半分空になったパフェの皿にスプーンを指しながら、兎が尋ねた。
隣でアルマがケーキを無言でほおばりながらうなづく。
レーヴェは少し疲れた顔になり、前を指差した。

「……そいつにとっての北じゃ」

（（（”方向音痴”か……））））

「とりあえず家だけでも決まれば、後は何とでもなるじゃろ」
「……了解、その仕事引き受けた！」
カンラはそう叫ぶと、加えていたストローをふっと吐きだした。
「困ってるんなら助けるのが俺の主義だからな！」
「さすが、勇者殿は懐が広い」
「単に考えなしなだけじゃね？」
そう呟いて、兎はパフェに残していたさくらんぼに手を伸ばした。
すかさず、口に含む。
カンラが。
「テメェ何してくれてんだよおおおお」
「早いもの勝ちじゃあああああ」
「で、その人は？」
「……それが、のう？」
困ったように笑うレーヴェの顔に疑問符を浮かべてアルマは首を傾げた。
「……悪いが、既に迷子じゃ」

「というわけで、まずは迷子探しか……」
「迷子、って年でもないんじゃがの」

街の中心にある公園へとやってきたカンラとアルマ、そしてレーヴェ。
兎には、先に家探しにまわってもらうことにして。

「その人の特徴は？」
「そうだよ、どんな奴かわかんないんじゃ探しようも無いじゃん」
「……一言で言うなら、黒、じゃ」
「くろ？」

そう、とレーヴェは頷いた。

「髪も服も、ついでに瞳も真っ黒じゃ。目立つから、探しやすいかもしれん」
「よっしゃ、いっちょ探すか！」

じゃらじゃらと飾りのついたおもそうな衣装に身を包んだ、

銀髪の男と。
行動、見た目とある意味すべてが目立つ男。
「……こっちも大分目立つけどね」
アルマは小さく呟いた。

「？何かしら」
同じ服を着た人々が、多いように見える。
不思議に思った一人が、近くにいた人物に声をかけた。
「あの、何かあったんですか？」
「ん？ああ、何でも事件らしい」
「事件、ですか？」
「まあ騎士団が出てきてるし、直ぐに解決してくれるさ」
同じ服装はどうやら騎士団の制服のようだ。
なるほど、と思いながらそれを眺める。
「一応お嬢さんも気をつけたほうがいいかもな」
「ありがとうございます、そうしますね」
もう少女というような年齢でもないのだが。

それでも身を案じてくれた好意は受け取り、”少女”はお辞儀を返した。

「……たしか、オフィーリア要塞、でしたね」

この街付近にある国の施設の名を思い出し、口元に手を当てて呟いた。

そして、微笑んで歩きだす。

漆黒の髪を、揺らしながら。

「人、多っ！！」

「なんじゃ事件でもあったんかの。ありゃあ騎士団じゃな」

「めんどくさ……」

「アルマ、とりあえず立ち上がれ」

座り込んだカンラとアルマを立ち上がらせながら。

レーヴェは見渡して小さく息をはく。

「これじゃあ探し難い上に動きにくいのう」

国の西側、国の入り口ともされるオフィーリア要塞。
ここには城の騎士団一隊による、強固な警備がなされている。
警備機関に加え、ここ一帯の治安を守っているのだ。

「どうやら、騒がしい連中が入り込んだらしい」
「暴動？」
「そこまでじゃなさそうじゃが、まあ、面倒ごとには変わりないか」
「カンラくらい？」
「そうじゃな」
「え、え、どゆこと？」
「気にするな。それより、どうやって探す？」

三人の間に沈黙が流れる。

「あーもー！！こうなったら片っ端から人を倒していけばいつかはたどり着く！！」

何にだ。
アルマとレーヴェ同時にそう思ったそのとき。

がし、と、カンラの腕がつかまれた。

続、人探し

「隊長、大声を上げている怪しい奴を連れてきました」
「通せ」
「はっ」

引き連れられたカンラ、その後ろからアルマとレーヴェ。
3人は騎士団につれられ、突き出される。

「ようやくカンラも裁かれるんだ……」
「え、ちょっと待てようやくって何？何もしてないよ俺？」
「胸に手を当てて考えてみると分かるよ」
「……わかんない」
「わかるんだ……私が」
「お前がか！」

「静かにしろ」
「「すみません」」

冷たい声音で言われ、二人は同時に頭を下げた。
隊長と呼ばれた男は、その声音のまま淡々と続けた。

「聞くが、この場で何をしていた」
「……人探し」
という名の暴挙にでようとしていたのだが、面倒なことになりそうなのでそこで止める。
「叫ぶ必要があるのか？」
「無いですね」
「え……あれ、俺をかばう気持は？」
「無いですね」
「ねえちょっと！？」
「……」
「「たびたびすみません」」
今度は無言で向けられた冷ややかな視線に、カンラとアルマはまた頭を下げた。
「こんだけ人が多いと探すのも大変でのう、それで大声を上げたというわけじゃ」
「なるほどな」
二人の変わりに、レーヴェはいかにもそれらしいことを言ってみせる。
とりあえずは納得したのか、男は思案した後口を開いた。
「なら早くしたほうがいい。この辺りはこれから危険だ」
「……わかった。ほれお前さん達、いくぞ」
「わ」
「レーヴェ？」

背中を押すように、レーヴェに促され。
3人はその場を離れた。

「隊長、よろしいのですか？」
「あれは無関係だ」

男はそう言い切った。
彼らは今追っているものとは違うと、知っていたから。

（しかし、あれは……）

「アリオス・シュトラウス。騎士団部隊長の一人じゃ」
少しはなれたところまで行き、先程の場所を見つめながら。
そう言うレーヴェに、アルマは首をかしげた。

「知りあい？」
「いや。じゃが、結構な有名人じゃからな」

金髪碧眼の整った顔立ちに、白が基調の騎士服。
その実力は若くして隊長を務めるにふさわしく。
現在は、国境であるオフィーリア要塞を任されている。

つまり、この街を実質守っているのが、彼である。

「まあ、向こうがこっちを知っとる可能性はあるが」

「しかたないって。レーヴェもある意味有名かもしれないし」

「……それはお前さん達もじゃろ？」

「それより、急いだ方がいいんじゃないか？」

きょろきょろと見渡しながら、カンラが言う。

いつの間にか、塀の上に立って。

「もうすぐしたら多分捕り物でも始まるぞ」

「え？」

「さっき言ってたろ、”これから”危険だって」

その言葉に、アルマとレーヴェは目を見張る。

”何者か”がここにいることが危険であるのなら、既に危険である。

”これから”と言ったということは、つまりこれから更に何かを起こすということ。

騎士団が行うことは、街を守ること。

つまり、その”何者か”を”これから”捕らえるのだろう。

「面白そうではあるけど……騎士団もいるわけだし」

「……」

「？アルマ、どうした」

「……カンラが頭使った……」

「まあ、飾りじゃなかったということじゃな」
「お前ら、俺をなんだと思ってるんだ……？」

周辺がざわざわとし始める。
人が、次第に数を減らしていった。

騎士団により、できるだけの避難が始められているのだろう。

「……カンラの言う通りではあるんじゃが」
「問題あるのか？」
「あいつ、事件とか好きじゃからのう……自ら進んで巻き込まれにいってなければいいが」

呟くようにそう言って、空を見上げた。

大きな音が、中心で鳴り響いた。

見上げていた空から、視線を戻す。
先程より人が減ったと入っても、まだ人の数はそれなりにいる。

騎士団も、動き始めていた。

「……なんだか面白そう」

にこやかにそう呟くと。
黒髪を揺らしながら、歩き始める。
”中心”に向かって。

魔女と魔賊

騒ぎがはじまり、穏やかだった周囲の空気が一変した。
あちこちで大きな音と揺れが起きる。

「騎士団なんぞに、捕まるワケがないだろォ！」

幾つか現れた人影の中に、ひときわ目立つ姿。
騎士団とは対照的に、黒を基調とした姿。
色こそ黒一色であるものの、造りや飾りの所為で派手に見える衣装。

「……ねえ、あれ」
「違うぞ」
「黒いし目立つけど」
「違う。というかあんな知り合いは謹んで遠慮願おう」
「……魔賊（マギ）、だね」

魔術の魅力に取り付かれ、崇拝する組織。
機関としては認められていないものの、その規模はそれなりに大きい。
その目標は、”魔女”。

「”魔女”に憧れた集団、か……」
「……え、でもあれ男じゃん」
「馬鹿。”魔女”はただの呼び名だよ。馬鹿」
「実際男の”魔女”もいるわけじゃしの」
「それより、わしとしてはあの手にある物が気になる」
恐らく主導者である人物の手にある、古めかしい表紙の分厚い本。
男はその本を開き、高く掲げる。
途端、当たりに不自然な風が巻き起こり、騎士団の足を止めた。
「！魔術……詠唱も媒介も無しに……」
「まさか、というかやはり、というか……あヤツら、伊達に魔女を目指してないのう」
レーヴェは呟くと、顔つきを変えた。
「カンラ、アルマ。悪いが、仕事が増えた」

「大分騒ぎも大きくなってきたな……ここまでは追って来れまい……」

「そうでもないぞ」

「！！？」

男の頭上から声が振りかかる。

あわてて見上げた先には、こちらへと落ちてくる人影。

急いで避けるものの、完全にはかわしきれずダメージを受ける。

「ぐあ！！？」

「逃げられると思ったのか？残念だったなぁ！！！」

「……」

ははははは、と高笑いと共に武器を振りかざすその様子は、魔賊の男よりも寧ろ悪役。

アルマはあえて口にはしなかったが、軽くため息をつく。

男は驚いていた表情を不敵な笑みに戻し、尋ねた。

「騎士団、じゃねえなあ……何だ、お前ら？」

「魔女の使いの者だ」

「貴方の持つその本を、回収しに来た、ね」

そう言って、アルマも杖を前にかざす。

男は堪えきれないように笑い出す。

「……ククク、お前らごときが”魔女”を名乗るとはなア……？」

「魔女じゃない、魔女の”使い”だ」

「それに、お互い様じゃないの？」
「どっちだろうと、俺の前に出てきたって事は、覚悟はできてるんだろうな？」
そう言うと、男は本を構える。
瞬時に、鋭い風が二人を襲う。
「……アゲインスト！」
詠唱していたアルマが杖をかざすと、襲い掛かる風に対抗する風が吹いた。
相殺された風は、静かな空気へと戻る。
「詠唱なしの魔術……」
「その本の力か」
「そうだ、これこそ我らの目的を叶える手始めとして手に入れた物だ！」
男は本を掲げたからかに笑う。
黒い服の下から覗くその目は、ある意味きらめくように輝いていた。
「うわあ、カンラより悪人面……」
「アルマよりは瞳が輝いてるぞ」
「魔法を使うためではなく、魔法を残すための本、”魔典書”」
「！？」

振りかかる声の主を探そうと、男は顔を動かそうとする。
が、身動き一つとることができず、表情だけを驚愕へと変える。

男とはまさに対照的な、真っ白な人物が、ゆっくりと現れた。

「悪いが、その本は”返して”もらうぞ」
「何だと……？」
「憧れるのは結構じゃが、盗みは良くないということじゃ」

そう言うとレーヴェは指を立て、そして軽く振った。
幽かな光がその軌跡を描く。
とたん、痺れたように男の手は本を掴んでいられなくなった。

「な……！？」
「いっただきー」

すかさずカンラがそれを拾い上げ、男から距離を取った。

「体が……魔術か……いや、違う！？まさか……！！？」

不敵に微笑むその姿を、男は知っていた。
白い衣装に身を包み。
日の光で白く映る白銀の髪と瞳。

「魔女、”銀昌”……！！？」

「ほーらレーヴェ有名人」

「あんまり嬉しくないのう……」
アルマの台詞に、”魔女”レーヴェはため息をつきながら答えた。
そして、もう一度男に向き直る。
「さて、本さえ戻ればそれでかまんのだが……一応騎士団がいるからな」
「逃がしたら後々面倒そうだしね」
「……なめるなァ！」
叫ぶような声。
男は力をこめて、動かない体を無理に動かした。
魔術がはじかれ、レーヴェにそれが跳ね返る。
痺れた手をレーヴェは見つめた。
「ほう、中々の精神力じゃ」
「……何か、俺も痺れてきたんだけど……？」
「そりゃあわしの魔術を跳ね返されたからな。安心しろ、わしも痺れとるから」
「私は痺れてないから問題無い」
「俺は！？」
カンラの言葉を聞き流しながら、アルマは男を見た。
その様子は、先程よりも”危ない”。
「問題はある、か……」
男が不意に側の壁を殴る。

ばらばらと崩れ去るそこから抜き出した手は、壁についていた鉄パイプを引き剥がした。

「ハ……魔女に会えるとは……オレはツイてるぜェ！！！！」

鉄パイプを大きく振りかざし、男は言い放った。

そして、そのまま。

動くことの無い男に、３人は不思議に思う。

が、その理由はすぐに訪れた。

「それはそれは、珍しい方がいらしたものです」

こつ、こつ、と。

足音が、ゆっくりと近づいてくる。

「魔女は不吉の象徴とよく言われますから」

男よりも”黒い”姿の人物は。

不吉に不敵に微笑んだ。

出会い×2

男は動かなくなったまま、ゆっくりとその手から鉄パイプを落とす。

その顔は苦渋を表すが、それを伝える声も出ないようだった。

「申し訳ないけれど、あんまり暴れられると騎士団に見つかっちゃうから」

大人しくしててね、と言って、指を振る。

先程レーヴェがしたのと同じように、その軌跡を光がたどる。

その姿を見て、レーヴェは安堵したように、しかし呆れてため息をついた。

「あらレーヴェ、探したのよ」

「それはこっちの台詞じゃ」

「じゃあ、この人がレーヴェの言ってた」

「ああ、迷子じゃ」

「あ、ひどい。ちょっと色々と歩き回ってただけよ？」

「それが迷子じゃと言うに……と、そうじゃ」

レーヴェがカンラとアルマに向き直る。

「お前さんとお前さんの家を探してくれた人たちじゃ」
「カンラだ、どぞよろしく」
「アルマです」
「はじめまして、ノウラといいます」
ノウラは服のすそを掴んでお辞儀をした。
顔を上げて、二人を見て、そして微笑んだ。
「もうお察ししていらっしゃるかもしれませんが、”魔女”です」

広場での仕事を終えたのだろう。
小さく騎士団の姿が見え始めていた。

ピリリリリリリリリリリ

「はいはーい……わかった、じゃ。……家のほうも見つかったって、兎が」
「それじゃあ、さっさとここを離れるか」
「あら、この人放っておいていいの？」
「何言っとる、今ここには騎士団に会いたくない面々しかいないじゃろ」
魔女という存在は、騎士団とはあまりいい関係には無い。
存在は感づかれるかもしれないが、それでも直接会わないに越したことは無い。
何か”問題”がおきてしまう可能性は、無いほうがいい。

それに。

「……とりあえず場所を変えよう」

「話はそれかから、だね」

男を放置したまま、四人はその場を離れた。

「隊長、この男が主犯核のようです」

「身動きは取れないようだが……錠をかけてから運べ」

「はっ」

アリオスはあたりを見渡す。

動かなくなっていた男以外に、人はいない。

また、特にこの場が荒らされた様子も無い。

ただ、男が持っていたはずの”本”は無かった。

恐らく”魔女”により創られたであろう”魔典書”。

アリオスは注意深くあたりを見渡す。

「……」

「どうしたんです？隊長」

「ギィ……お前はもう少し普通に出て来い」

アリオスの目の前。
近くの柱を使い逆さづりで現れたギィは、笑ってそこから降りた。

「どうだ？」
「もうこの辺りには何も無いですよ」
「そうか……」
「何か気になることが？」
「……いや」

（……得体が知れない、か……）

小さくため息をついて。
アリオスは振り返り、その場を離れた。

「なるほど、レーヴェの幼馴染……」

カップのお茶を飲みながら、アルマはうなづく。
カンラ達の家に、四人そして合流した兎はいた。

「……え、同い年？」
「大体同じですね」
「……幾つになるんだっけ……」

「こら、やめとけって」
指を折って数えだすアルマをカンラが止める。
「指で足りるわけ無いだろ」
「お前も十分失礼だよ！」
兎に殴られ強制的にカンラは黙った。
アルマも諦めたのか手を下げる。
「見た感じだと、私とあまり変わらないんだけど」
「そうじゃの。アルマよりは上か」
「まあ、そういうわけで一人暮らしを始めようかと思ってね」
「どういうわけかはわかんないけどなるほど」
「皆には家まで見つけてもらっちゃって……本当にありがとう」
「気にするな、困ったときはお互い様だ！」
「ほう、じゃあ今回の件はボランティアということでいいのか？」
「「「それは駄目」」」
「……生活がかかると息が合うの、お前さん達」
「しかし、結構よさそうなところだったなー俺も引っ越すかなー」
「家賃滞納しておいて何言ってんの？馬鹿なの？」
「兎酷い！俺に対して特に！」
「え、カンラは馬鹿だよ？」
「え、何でアルマが言うの？何で！？」

「いいお友達ね、うらやましい」

三人の様子を身ながら、ノウラは微笑んだ。

「レーヴェがここに居つくのも分かる気がするわ」

それを見て、レーヴェは軽くため息をつく。

「安心せい、今日からお前も仲間入りじゃ」

「……なら、嬉しいかな」

「それより、お前も一応行動には気をつけろよ」

「騎士団のこと？それとも魔賊？」

「どっちも、それ以外にも、じゃ」

その日の夜。

「本日隣に越してきました。これ、よかったらどうぞ」

用意した菓子折りを差し出しつつ、ノウラは丁寧に頭を下げ

た。

扉を開けて立っていた隣人は、静かにそれを受け取る。

「何分田舎者ですから、ご迷惑をおかけしたらごめんなさい」

「わざわざすまない。こっちも仕事でいない事が多いし、気にしなくていい」

「では、これからよろしくお願いします」

頭を上げて、微笑んだノウラはふと気づいた。

「名前を言っていませんでしたね。ノウラと申します。」

「アリオスだ」

「これからよろしくお願いしますね、アリオスさん」

「ああ」

こうして、ノウラの新しい生活は始まりを告げた。

様々なものを巻き込んで。

剣とマニアと

職業柄、魔物と対峙するものも多い世の中。
そのため、街に一つは武器屋がある。
その一つ、刃物を主に扱っている店。

「らっしゃい！……お、カンラじゃねえか。また新調か？」
「そんなとこ。おっさん、新しいの入ってる？」
「おう、その辺の棚のヤツだな」

指し示された棚に向かい、カンラは眺めた。
置かれた武器はどれも個性豊かなもの。
それぞれに利点も欠点もあった。

「今の武器がそろそろ持たないんだよなー……」
「無茶な使い方を続けてりゃあ、そうなるさ」
「無茶、なあ……」

一つ、剣を手にとって、手に馴染むかの確認として軽く振り回す。
軽く、カンラの手の内でくるりと綺麗に弧を描く。

「……」

「よ、珍しく真面目な顔してるな」
「うおわ！？」

突然かけられた声に驚き、思わず剣を落とす。
切っ先はカンラの足に触れるか触れないかのところで、床を貫いた。

「……いい切れ味だな」
「ふざけんなよお前！マジでびびったわ！！」
「悪い悪い」
「……てかアンジェ、お前帰ってきてたのか？」
「昨日な……って、そこで区切んな」

そう言って、床に刺さった剣を丁寧に抜く。
そしてそれを自分の目の前に掲げると。

「……」
「おーい戻ってこーい、アンジェリトさーん」

剣を眺めうっとりしたようにため息をつくアンジェリトに、カンラもため息をついた。

「で、今度はどこまでさまよってたんだ？」

椅子に逆向きに腰掛け、背もたれに顎を着いて、兎が尋ねる。

住んでいるアパートに戻ったカンラたちはそこで昼食を取っていた。
昼食と言っても、さっき買ってきたサンドイッチだけなのだが。
「アイオーラには寄ってきた。あそこの武器は見た目が綺麗だが実用的じゃないな」
「花咲く観光地で武器あさりかよ……」
「確かに華やかだったな、レイピアで一つかなり装飾の良いものが……」
「はいはい聞いた聞いた」
話が長くなる前に切るため、兎がサンドイッチを押し付ける。
口に含みながら、アンジェリトは続けた。
「大体お前も勇者なら、聖剣の一つくらいは手に入れろよな」
呆れたように言われ、カンラは言葉に詰まった。
誰も覚えていない、いや、知られていないかもしれないが、カンラは勇者だ。
正確に言えば、勇者の”一族”である。
「……だいたい聖剣なんてそう簡単に手に入るもんじゃないだろ」
「勇者のために生まれた武器は、勇者を求めるんだ」
聖剣は、勇者の血を引くもののために”生まれた”剣のことである。

幾つか既に存在が証明されたものや国により回収されたものがある。
強力なため、一般のものが扱うには過ぎた品、とされ、もっぱら”飾り”となっているのだが。

「それにお前、普通の武器じゃ長持ちして無いだろ」
「う……」

図星の言葉がカンラに刺さる。

「……それはこいつの使い方の問題じゃね？」

兎はカンラの戦闘スタイルを思い返す。

まず先制特攻。
相手に攻撃の隙を与えない為に特攻。
アルマの魔術詠唱の時間稼ぎのために特攻。
とどめの特攻。

特攻。

「特攻しかして無いじゃん」
「……まあ、それもあるな」
「俺もうちょっと考えてるよ！？確かに特攻はするけど！」

カンラ自身も、自分の武器の扱いが丁寧だとは思っていない。
それこそ、定期的に新調しなければならない程。

口ごもるように、カンラはサンドイッチを頬張った。

さらに、追い討ちをかけるように兎が口を開く。

「まあ、カンラじゃ勇者には見えないから仕方ないんじゃね？」

「何それ！？大体、アンは聖剣が見たいだけだろ」

「何を言うか！見るだけじゃなく触りたいに決まってるだろ！」

「知るか！」

「で、何でまた戻ってきたんだ？もう暫く戻らないと思ってたけど」

最後のサンドイッチを手にとりながら、兎が尋ねた。

すると、アンジェリトは少々真面目顔になる。

「ああ、ちょっと噂を聞いたんでね」

「噂？」

「魔剣がこの町に来るってな」

聖剣と魔剣

はじまりは、”最強”の剣を生むことだった。

ごく自然に生まれるとされる聖剣には、いまだ解明されない謎が多い。

また、いつどこでどうやって、生まれてくるかも分からない。

そこで、人々は考えた。

だったら、自分達で創(生め)ればいいのだと。

聖剣に使われている素材と、それを鍛えるだけの技術。

そうして生み出された、人の手による”聖剣”。

魔術を応用した技術を用いていたらしく、元来の聖剣と区別をしてついた呼称が。

”魔剣”

はじめの一つが創られたのをきっかけに、研究は更に進められていった。

しかし、物事と言うものは、そう単純でも簡単でもなかった。

”最強”を求めた結果は、”最凶”。

暴走した魔剣により、研究所はそこで働くものを含めて壊滅。

そして、魔剣も姿を消した。

研究には終止符が打たれ、魔剣の存在は暗黙のうちに誰もが口をつぐんだ。

そして何時しか、その存在は忘れられていった。

人々の中から、魔剣は消えていったのだ。

しかし、魔剣は消えたわけではない。

「今も何処かで、彷徨いつづけている」

「……」

「専門外だから、あまり詳しくはないんですが」

剣の製造に用いられた技術は、魔女により伝わったものだともいわれている。

しかし、製造に魔女そのものは関わっては居ない。

古(いにしえ)から魔術を伝えてきた魔女にとって、魔剣創造は好ましくはなかったのだろう。

そして、魔剣の製造者側にとっても、魔女の存在は好ましくなかった。

「ごめんね、あまり参考にならなくて」

「ううん、十分。こっちは何も知らなかった訳だし」

謝るノウラに、アルマは手を振って答える。

本来なら、こちらこそ知っていなければならないことなのに、と。

……勇者のために創られた魔剣の話なのに。
勇者と行動をともにしている彼女は、小さくため息をつく。

「だから、ありがとう」
「……ふふ」
「ノウラ？」
「最近魔剣の噂を聞いたから、気になったんでしょう？カンラ君のこと」
「まあ、カンラが居ないと困りますから。彼は壁……相棒ですから」
「……なるほど」

言い換えはしたがきっぱりと言ったアルマに、ノウラはやや苦笑いをこぼした。

魔術師は、（アルマの場合もそうかはまあ別として）基本肉弾戦に弱い。
また、詠唱中には無防備になってしまう。
一人での活動には、あまり向かない職業なのだ。
主に一人で活動する魔術師だとしても、前衛職を護衛に雇うことが多い。

「レーヴェは一人でも大丈夫みたいだけど」
「彼も魔女だから、普通の人よりは元が頑丈だからかしら」
「私も鍛えようかな……」
「アルマちゃんは十分強いと私は思うけどなあ」

「というわけで、カンラを借りにきたんだ」
「ああ、どうぞどうぞ」
「え、あれ、兎さん？」

アンジェリトの申し出に、兎はカンラの背中を押す。
カンラは立ち上がり、慌ててそこから離れた。

「いや、何で！？」
「もし本当に魔剣が近くにあるなら、多分勇者をもっ……つれてけば反応すると思うんだ」
「今持ってくって言おうとした？俺のこと物扱いした？」
「もってけもってけ、在っても邪魔だから」
「酷い！？」

逃げるカンラに、痺れを切らしたのかアンジェリトはばん、と机に手を突いた。

「とーにーかーく！俺は魔剣をさわりた……探したいんだ！」
「魔剣があるかもしれないことでもう本音が隠せてないな」
「言っちゃえよ、魔剣を見て触って抱きしめたいんだろ？そうなんだろ？」
「その通りだよ！」

アンジェリトの迷いのない言葉に、二人はため息をつく。

しかし、カンラ自身も魔剣に興味がまったく無いわけでもなかった。
しばし考えるように顔をしかめた後、観念したかのように大きく息を吐いた。
「……とりあえず、アルマが帰ってきてからな」
「勝手に持って行ってもいいとおもうけど、ぶっ飛ばされるかもな。カンラが」
「え」
「で、アルマは？」
「そういえば、まだ帰ってこないな」
兎はそう言って部屋の時計を見る。
針は、アルマが出かけてから三周を過ぎたところにあった。

カンラたちが帰った後の武器屋。
「……」
棚に置かれた一つの剣を手にとり、見つめる人物。
目立たない黒い布で覆った姿は、店内で浮いていた。
武器屋の店主が、その姿に声をかける。

「お、兄さんそれ買うかい？」
「いや……俺には必要ない」
そう言って、手にした物をおいて、店を去る。
先程まで手に取られていた武器を見て、店主はため息をついた。
「今日はお前、売れないなー」
そう言うと、店主はその剣を新しい商品が並ぶ棚へと戻した。

「……近い、な」
黒に包まれた人物は、街を歩く。
上を見るでもなく、下を見るでもなく。
ただ、何かをみすえて。
「この町に、在る」
ただ歩いていく。
周囲にある物の存在も感じないように、目もくれず。
ただ、一つだけを探して。

聞こえた

（……魔剣……）

数分前に、ノウラの家を出て。
アルマは足元を見ながら道を歩いていた。

人々が求めた末に作られた魔剣。
求められたのは、強大な力。
その力は、何かをするために。

（力がなければ、何もできない、か……）

アルマは暫く自分の掌を見つめていた。

ふと、脳裏に以前であった魔賊の姿を浮かべる。
男の、あの光るように眩しい目を。

（……いや、あれは無い）

考えるのも疲れたのか、頭を振りかぶる。

「帰ろう……そして寝よう」

はあ、とため息を吐き、その目を何時もより眠たげに細めた。
ふと、視界が薄暗くなり、アルマは足を止めた。
前を向くと人が居て、それが作る影が、アルマを覆っていた。

「……」
「？」
「……、」
「！」

ほんの、一瞬の出来事だった。
瞬きの間ほどの時間で、その場の景色は変わっていた。
その呟きが聞こえたアルマは、僅かな反応を見せ、その場を跳び退けていた。
離れた場所からその場を見て、顔をしかめる。
舗装された道は、深く抉れていた。

「……何するんですか、いきなり」
「……」

黒い、服、と言うよりも布を纏った人物は、答えない。
以前見た魔賊と少し似ていたが、違うとアルマは確実に言えた。
持っている気が、明らかに違う。
そして、もう一つ。
目の前の人物が先程かすかに呟いた言葉。

それは、アルマには聞きなれているが、普段誰かがいうのを聞くことは無い言葉。

”勇者”

「……勇者の気配だ」

「……残念だけど、私は勇者じゃないですよ」

「だろうな」

その言葉に疑問を感じながらも、アルマは隙をうかがっていた。

幸い、街の中心からは離れていたため、周囲の被害は気にすることは無い。

しかし、そのためここには”壁”がないのだ。

アルマが術を放つための時間を稼ぐ壁が。

相手は不明だが、少なくとも大きな物理攻撃力を持つことは、抉れた地面から間違いない。

ただ、姿からはその方法が見えてこないのだ。

ここで相手と戦うことは賢くないとアルマは判断した。

とにかく、一度逃げることを考えなければならない。

「分かっているなら、さっさと勇者のところにでも行ったらどうですか」

「知っているな」

「！」

「お前は、勇者を知っている……」

アルマの体が一瞬震える。
相手の様子に、怯んだのだ。
突然に変わったわけではない。
今まで、表に出ていなかっただけ。

あふれ出したその殺気にも似た感覚に、アルマの体が反応したのだった。

「……っ」

一瞬にしてアルマを覆ったそれは、逃げるという考えを増大させながらも取り消させた。

逃げなければ危ない。
このまま逃げてはいけない。

それとも、はたして逃げられるのか。

相手が探している勇者は、間違いなくカンラ。
しかし、気配を感じても居場所まではまだ分かっていないのだろう。

そして、偶然カンラと近しいアルマを見つけた。

「お前が居場所を吐くか、それとも」
「え」

目の前から消えた姿に、思わず声を出して驚く。
次の瞬間。
「お前が消えれば、現れるか？」
アルマの顔のすぐ下で、見上げながら男は笑った。

「アルマの奴、何処行ったんだ？」
あたりを見渡しながら、アンジェリトはため息をついた。
魔剣探しにカンラを”借りる”為アルマの許可がもらいたいのに、そのアルマが帰ってこない。
そこで、カンラと二人、出向いていくことにしたのであった。
「出かけるとき場所は行ってなかったのか？」
「ああ、それなら」
『ちょっと出かけてきます』
『ああ、何処行くんだ？』

『輝かしい未来まで』

「って」

「……相変わらずだな、アルマは」

なんとも言えずに二人は黙って、また歩いていく。

「……にしても遅いだろ。アルマが一人で出かけることって良くあるのか？」

「まあ、仕事の依頼確認とか買出しでは在るけど……こんなに長いのは珍しいな」

基本はカンラと行動をともにしているアルマ。

後衛職業でも在るので、一人で街の外へ出歩いたりはしない。

というより、あまり外を出歩かない。

「この辺に居なかったら、ノウラのところにでも……」

思いついた行き先を提案しようとした、その時。

――――――

「え」

「カンラ、どうした？」

突然言葉を止めたカンラに、アンジェリトは不思議そうに顔

を覗き込んだ。
しかし、カンラ自身もまた、不思議そうな顔をしていた。
「いや、何か」
言いようの無い感覚に、震えるように小さく体を動かす。
聞こえた？
何が？
誰が？
「誰かに呼ばれたような気がしたんだけど……」
その後で。
遠くのほうで、大きな音がしたのが、小さくカンラの耳に聞こえた。

魔剣、遡遡

ぽたり

口元をつたい、赤く黒く滴り、地に落ちる。
口の中にたまったそれを地面の上に吐き出して。
睨み付けるように、アルマは前を向いた。

「……ち」

腹部に染みる赤は、抑えても無駄だというように止まらない。

「フン……魔術師か」

マントの下から現れた灰色の瞳が、射抜くようにアルマを見た。

同じく灰色の髪は、乱れたようになびく。
マントには確かな焦げ後がついていたが、男の方は少し火傷を負った程度だった。

（至近距離での魔力暴発でもあの傷……それに）

「少しは、楽しめそうだな？」

（無い……武器が、無い……！？）

確かに、素手ではなく武器による攻撃を受けた。
なのに、男は何も手にしていないし、隠した様子も無い。
「次はどうかわす？」
「！」
武器は持っていないが、構えた男の姿を見てアルマはすかさず手を前に出した。
大きな力がぶつかり合い、勢いが生まれる。
そして、周囲一帯をなぎ払うように大きな振動。
周囲の木が、柔らかいものであるかのように幹を押し曲げる。
（剣圧なのは間違いない、けど……これは……）
さっきより傷の増えた体を抑えながら、前を見据える。
怖いほどの笑みを浮かべた男は、そこに立っている。
詠唱時間を稼げないアルマにできることは、魔力を暴発させて攻撃の直撃を防ぐこと。
自身も巻き込むその技で、身体はもう既に限界が近い。
だが、一つ分かったこともあった。
男がとどめのために手を振り上げる。
アルマは、息を切らせながらただそれを見つめていた。
「もう終わりか」
「……ふふっ」

「どうした？自分の状況に笑えてきたか？」
「いいえ……噂をすれば影、というのは、本当だなと思いまして」
「……」
男は、ぴくりと反応して動きを止める。
しかし、すぐにまた元に戻ると。
振り上げた手を、下ろした。

（……痛くない）
構えたものの襲ってこない痛みに、アルマは閉じていた目を開ける。
目の前に移ったのは、見覚えの在る、こちらを見つめる赤い瞳。

「大丈夫か？」
「……」
「アルマ？」
「……とりあえず、離れろ」
「……え……この場面で……？」
アルマを抱きかかえたまま、カンラは苦い表情を浮かべた。
気にせずに、アルマはため息をつく。

「……後で起こして」
「……了解」

意識を手放すアルマを、近くの木の下へと寝かせる。
いつもなら、もう少し文句を言われて、もしかしたら殴られたかもしれない。
アルマの体中に在る傷を見て、ぎゅっと唇をかむ。

カンラは、先程までアルマと対峙し、その手を振り下ろしていた男と向かい合った。

「俺が代わる。それでいいだろ？」

まっすぐな目を向けられ、男は暫く黙っていた。
が、口の端をゆっくりと挙げる。

――タ
――――ケタ

――ミツケタ

「……お前」
「勇者、だな」
「！！」

「お前を、探していた」

男は笑みを浮かべて、カンラに”刃”を向けた。

「くっ！！？」

素早く抜いた剣でカンラは斬撃を受け止める。
が、その勢いの強さに引きずるように後退した。

「お前……！？」
「俺はお前を探していた。”それしかなかった”からだ」
「？」

「世界に忘れられるのは、どんな気分だ？」
「！！！」

カンラの元に訪れる、二撃目。
剣を横に構えて受け止め、同時に押し込む。

が。

「げ！！？」

刃のぶつかっていた部分が、音を立ててぱきりと割れた。
折れた剣先を投げ捨てて、カンラは慌てて後ろへ飛ぶ。

そこへ来る三撃目。
今度は受け止めずに、飛んでかわす。

しかし。

「ぐ……」

かわした先に、四撃目が待ち構えていた。
剣の柄だけでは上手く受け止められず、カンラは吹き飛ばされ、地面に叩きつけられた。
「く、そ……」
薄く開いた視界の中に、たたずむ人影と、薄く光る大きな刃。
「！」
「！？」
不意に、周囲に煙が巻き起こった。
白い靄は一瞬にしてあたりを包み込み、全てを覆い隠した。
「カンラ！」
「アン！？」
「急に走って何かと思ったら、何してるんだよ！！？」
「これ、お前か！？」
「目くらましだ！長くはもたない、行くぞ！」
小声ながらもせかしながら、アンジェリトはカンラを起こす。
先に拾ってきたのか、背中にはアルマを抱えていた。
「待、おい……！？」
「場所が悪い、分が悪い、何より相手が悪い！」
そう言って、アンジェリトはカンラが対峙していた男がいるだろう方を見た。
煙で姿は見えないものの、そこに”在る”と、確実に分かる。

「……何しろ相手は、最強の”魔剣”そのものだ」
「！……やっぱり、か」

アルマが気づいたこと。
そして、カンラが見たもの。

男自身が”刃”となっている、その姿。
伸びた腕が刃となって襲い掛かる瞬間の光景が、蘇る。

「とにかく！一旦引くぞ！……アルマがまずい」

言われて、はっとする。
抱えられているアルマから、赤い雫が滴り落ちていた。
アルマの顔色は普段よりも薄く、白く見えた。
腹部の傷は、思っていたよりも深いらしい。

「……分かった」

白い煙とともに、カンラたちはその場を離れた。

武器と人と

掌からこぼれる淡い光が、アルマの腹部を照らす。
次第に、あふれた赤は和らぎ、同時にアルマの顔色も色味を取り戻してきた。

「……これで大丈夫だ」

ふう、と息をついた兎はかざしていた手を下ろした。
そして、額に滲んでいた汗を拭う。
ほっとして、カンラとアンジェリトはアルマの顔を見る。
どうやら眠っているらしく、規則正しい呼吸をしていた。

「致命傷じゃあなかったけど出血が多かったからな。アンの判断は正しかったぞ」
「俺もカンラも、治癒術は使えないからな」
「……そういえば、兎って回復役だったっけ……」
「ああ、俺もすっかり忘れてたわ……最近は特に怪我も無かったしな……」

苦い笑みを浮かべながら、兎はため息をついた。

「で？その久々の怪我の原因は何なわけ？」
「……魔剣、だよ」
「お前が言ってた、あの？」

アンジェリトはこくりと頷く。
カンラも、考えるようにやや下を向いた。
「噂程度には耳にしてたけど、まさか本当に”生きてる”とはな」
「生きてるって……どういうことだ？」
「……お前ら、強い武器の条件って、知ってるか？」
アンジェリトの問いに、カンラと兎は互いに顔を見合わせる。
「そりゃあ、武器の攻撃力とか」
「使いやすさじゃないか？」
「まあ、それもそうなんだが……」
少し間をおいて、アンジェリトは言った。
「使い手、だよ」
「「！！」」

どんなに強く、どんなに使いやすい武器だとしても。
それを扱うのは、結局人である。
どんなに強力な武器を持っていても、それを振るえなければ意味は無い。
どんなに強力な武器をもっていても、当たらなければ何ということも無い。
聖剣が、勇者の為のものだといわれている所以も、それ。

普通の人では、扱うことすらできない武器なのだ。

「分かるだろ？最強の剣を創るために必要になったのは、最強の使い手、だ」

「……見失ったか」

煙が晴れた後。

既にその場から離れていた勇者の気配を探ることはできなかった。

すぐにその場を離れてしまったのだろう。

街にあるタワーの頂上から、見下ろす。

人の流れる様子が小さく見える。

そこから聞こえてくる、賑やかな声も。

暗くなってきたからか、あまりに高い場所にいるからか、気づくものは居ない。

男は、闇に溶けるように姿を消した。

今となっては殆ど知られてない、魔剣を創っていた研究施設での大事故。
殆どの研究員と研究成果は、そこで消えていった。

「魔剣の暴走、か？」
「恐らく。創ったはいいけど、その意思制御は完成してなかったみたいでな」
「でも、そんな大事、何で誰も知らないんだ？」
「元々裏で行われていたことだったし……何より、非人道的だからな。公にしたくなかったんだろ」

武器とはいえ、これは生体実験。
しかも、終わりの原因が、自分たちが創ってたものである。
国としても、あまり表立っていえたことではなかったのだろう。

「で、そのときに消滅したと思われていた魔剣が、実は生きてさまよっていた、ってわけだ」

まさかこの目で見るとは思ってなかったけど、とアンジェリトは付け加える。
生きた武器と言うのも、いまだに信じがたいことなのだろう。

「……それが何で、アルマを襲うのさ？」

今までだって、魔剣は生きていたはず。
しかし、魔剣による事件など、起きてはいない。
少なくとも、一般に知れ渡るような形では。

「それは……」

アンジェリトは口ごもる。
恐らく、あの場で魔剣の言っていたことが聞こえていたのだろう。
代わりに続けるように、カンラが口を開いた。

「俺、だよ」

魔剣の中には、聖剣を創る素材が含まれている。
聖剣は、勇者のために生まれるもの。

創られた中でもあった、ただ一つのしっかりとした記憶。
勇者を、求めてきたのだ。

その目的は、どうであれ。

「俺を探してここに来て……俺とつながりの在るアルマを、先に見つけて」

攻撃した。

カンラは眠るアルマの方を見た。

深く眠っているのか、目を覚ます気配は無い。

『世界に忘れられるのは、どんな気分だ？』

「……お前は今、どんな気持なんだろうな」

そう、小さく呟いた。

「兎、のど渇いた」

「俺にとれってか」

腹部を押さえてじと目をしてみせるアルマに、兎はため息をつきながら立ち上がった。

それを見て、レーヴェはくく、と喉を鳴らして笑う。

「意外と元気そうじゃな、安心したぞ。見舞いの品は必要なかったか？」

「ありがたく頂きます」

レーヴェが差し出す果物の詰め合わせを、アルマはしっかり

と握りしめた。
笑いながらも、レーヴェはアルマの様子を眺める。
あれから一週間は過ぎた。
外見の傷は殆どなくなっており、見た目と態度は回復済みである。
しかし、腹部に受けた傷はまだ完治していないのか、ベッドに腰掛けたまま動こうとはしない。
兎もなるべく彼女が動かないようにと気遣っている。

「レーヴェ？」
「いや、何でもない。カンラはどうした？」
「アンと出かけた」
「アンジェリトと？」
「武器、壊れたから。調達にでも行ったんじゃないかな」

アルマは視線を動かし、壁に立てかけてある刃が半分無くなった剣を見た。
その表情が少しだけ硬くなったのを、レーヴェは見抜く。

「……アルマ」
「何？」
「リンゴとメロン、どっちが」
「メロンでお願いします」
すぐに帰ってきた言葉に、レーヴェは笑って了解、と答えた。

店をでたところで、カンラは大きく伸びをした。
隣では、包みを大事そうに抱え微笑むアンジェリト。
「「……はあ……」」
甘いため息をついたアンジェリトに、カンラは苦いため息をこぼす。
武器屋に行くとこんな感じになるのは分かっていたけれども。
買った武器をいつまでも抱えられていては困る。
「ほら、行くぞ！！」
「えー」
「えー、じゃねえ！それで可愛いつもりか！」
「なんだか楽しそうだね」
聞こえてきた声は、困ったようだが穏やかに。
微笑んだノウラの姿が、明るい街に目立つように黒を添えた。
「こんにちはカンラ君、お出かけ？」
「ノウラか。まあ、そんなところだ」
「魔剣を探しに？」
驚いた二人に、あどけなさを残す顔が大人びた笑みを浮かべ

る。
その不思議な印象に、カンラとアンジェリトはしばし見入るように見つめた。
はっとして、アンジェリトが尋ねる。
「何で分かったんだ？」
「んー、アルマちゃん、かな」
先日アルマが魔剣のことを聞きに来て、その後直ぐに怪我をした。
それだけで、何となくの事態は察することができた。
そして、それからカンラが動いたとなれば。
ね、と微笑むノウラに、カンラはお見事、と軽く両手を上げるしぐさをする。
のんびりとして見える彼女も、齢不詳の”魔女”。
そして、曲者レーヴェと古い付き合いがあるのだ。
「……でも一つだけ訂正させてもらうと」
「？」
「探すんじゃなくて、会いにいってくるんだ」
そう言って、カンラはにやりと笑った。

生きる目的

「よ、文字通り”高みの見物”か？」

街はずれの高台にて、カンラは見覚え在る後姿に声をかける。
振り返った魔剣は、カンラを見ても眉一つ動かさない。

（ま、読まれてた、か）

少し離れて、アンジェリトは様子を見ていた。
伝説ランクの武器をしっかり観察したいという気持もあった。
それに、今回は”付き添いだけ”という約束をしたから。

魔剣は振り返り、右手を掲げ刃へと変えた。
薄い光を待とう刃を、羽の様に広げる。

「っと、ちょっと待て！お前の目的は結局俺と戦うことなのか？」

「……正確には違う」

「お前自身が、目的だ」

言い放つと同時に、魔剣は刃を振りかざした。
襲い来る斬撃は、カンラの手元で方向を変える。
カンラが同じく斬撃により、斬撃を曲げたのだった。

「さっすが俺、勇者様、人気者？」
「ちっ！」
軽口を叩きながらも、踏み込んで今度はカンラが仕掛ける。
魔剣は瞬時に左腕も刃へと変え、受け止めた。
感心したように、思わずアンジェリトは口笛を吹いた。
体が刃だということは、攻撃だけでなく防御にも使える。
そして。
「げ」
嫌な顔をしたカンラに向かい、刃の”蹴り”が飛んできた。
間一髪でかわすものの、頬を掠めてそこから薄く赤がにじみ出る。
（見た目も素晴らしいけど、威力も抜群だな……）
思わず惚れ惚れとしながら、アンジェリトは魔剣を見ていた。
（けど、カンラの武器もそれなりのものを選んでる。今回は折られないぜ？）
今度はカンラの手にある剣に視線を向けて。
アンジェリトは楽しそうに笑みを浮かべた。
「お前ピリピリしすぎじゃね？もっと気楽に行かないと疲れるぜ？」

「煩い……お前に何が分かる」

「勝手に創っておいて、勝手に消そうとしやがって」

「「！」」

やはり、と、アンジェリトは魔剣を見た。
研究施設を破壊したのは、魔剣。
それは事実なのだろう。
けれど、そのきっかけは。

距離を取って、カンラはふうと息を吐いた。
そして、魔剣を見据える。

「まだ、答えてなかったな」

『人に忘れられるのは、どんな気持だ？』

勇者として、人のために生きてきて。
次第に、人から忘れ去られていく。

人の為、が生まれる目的だとしたら、消えるときも人による
ものなのだから。

（似てるんだ。だから）

だから、魔剣はあんな質問をしたのだろう。
カンラは顔を上げて、魔剣を見た。

ずっと、人を救うという使命を持って生きてきた勇者は。
魔王も居ない、昔と比べて比較的安全な世界で。
勇者が、必要の無い世界の中で。

ふと、気がつく。

『あれ、俺今自由じゃね？』

「そう考えたら、楽しくなってきた」
「……は……？」
「だってそうだろ？俺が俺として生きていく、始まりだぜ？」

カンラはにこりと笑った。
心から楽しい、というように。

「生まれた目的とか、理由とか、そんな大層なもん、知らないけど」

もしかしたら誰にでも在るのかもしれないし、無いのかもしれない。
でも、そんなことは関係ないのだ。

「お前がどう生きたいか、どう生きるかは、”これから”決めるんだ」

あまりに明るく、はっきりとした答え。
それは予想していなかったのか、魔剣は明らかに動揺していた。
カンラは、揺れる魔剣の―男の目を、真っ直ぐ射抜いた。
「じゃあ今度はこっちから質問な」
「お前、これからどうしたい？」
その問いかけに、魔剣は揺れる。
今までの考え方とは、全く逆ともいえる、カンラの生き方。
それは、魔剣が考えもしていないことだった。
けれど。
「俺、は」
急にカンラの様に考えることはできない。
しかし、今生きているのは少なくとも、消えたくなかったから。
どうしたい？
男は顔に手を当てて、苦渋の表情を浮かべた。
それを見て、カンラは一人ニヤリと笑みを浮かべ。
「隙ありいいい！！！」

唖然とした空気の中、攻撃をうけて男は膝をつき、カンラはそれを見下ろす。
その出来事に、アンジェリトもついていけなかったのか口をあけて固まる。

「ふはははは っ！戦いの最中だということを忘れていたか！！」

「ちょ、今の状況でそれ！？なんかいい感じにまとまりそうだったじゃん！？」

「戦いとはどちらかが倒れるまで行われる、そういうものだ……」

「無駄に格好つけんな！お前本当に勇者か！」

「勇者だ！」

はははは、とカンラは高く笑い声を上げる。
さながら、悪役の様に。

「……ぐ」

「まあ、勝手に創っといて勝手に無かったことにされるのはイラっとするけどさ」

ゆっくりと起き上がる男にカンラは向かう。
先程とはまた違った笑みを浮かべて。

「”それ”はアルマの分な。覚えとけよ」

「……」
「あとさ、お前せっかく最強なんだから、世界征服でもしてみるか？」

そしたら、また相手してやるよ、と言って。
差し出された手を無視して、男は立ち上がる。

「……お前は……」
「？」
「……もういい」

立ち上がり、その刃を消した魔剣は、はあ、と息を吐いた。

「……馬鹿馬鹿しい」
「え」
「お前に執着することが馬鹿馬鹿しくなった」
「え？」
「お前に関わるのはやめる……俺が、決めた」
「それがいい、ぜひそうしたほうがいい」
「え……え……」

魔剣の言葉に、アンジェリトも頷く。
呟くカンラも無視して、男はさっさと歩き出す。
まるで、さっきまで何も無かったかのように、前を見て。

「あ、おい……！……お前、名前あるのか！？」

去り行く姿に向けて、カンラは叫んだ。
男は足を止める。

「覚えといてやるからさ、俺が」
「……遠慮する」
「え……」

その言葉に少し落ち込んだ様子のカンラを見て。
満足したように、見えないくらい少しだけ口の端を挙げて。

「クラウス、研究時の呼び名だがな」
「……そっか……またな、クラウス！」

そのまま、また歩き出す。
真っ直ぐ、前へと。

鼻歌まじりに足取り軽く歩くたびに、その漆黒の髪が揺れる。
昼間の中、まるで夜の様な彼女は、階段を上ったところで足を止めた。

「……？」

アパートの自分の部屋の前。
足元に、小さな小箱が一つ、置かれていた。

「……えっと、申し訳ありません」

室内に大きく開いた穴を見つめながら。
申し訳なく苦笑いを浮かべつつ、ノウラは頭を下げた。

「気にするな、お前の所為ではないだろう」
「いえ、でも……私の不注意でお家が……」

最近出没している、爆弾魔。
街中や民家にまで、いたるところに小さめの爆弾を置き回っては爆発させる。
人的な被害は少ないものの、物的被害はかなりのものになっていた。

ノウラの部屋の前においてあったのも、それ。
しかしノウラがそれを室内に持ち込んで爆破させてしまった為に。
部屋の中はぼろぼろ、壁が壊れて隣のアリオスの家まで被害を広げていた。

「修理屋さんも暫くは忙しそうですし……暫くこのままですね」
「仕方ない、町中で被害が起きている……こちらのほうが申し訳ない」

寧ろ自分にこそ責任を感じ、ため息をつく。
騎士団であるアリオスは、現在その爆弾魔を追っている最中。
しかし、中々証拠も残さない為に、いまだ野放しの状態であった。

ノウラがアリオスの素性を知ったのは、引越し後暫くしてから。
街の情報収集の一環の中で、であった。
もちろん、ノウラの素性は明かしていない。

「暫くは俺の家で良ければ、自由に使ってくれ」
「いえ、そういうわけには」

「このままでは生活もできないぞ」
アリオスの方は壁のみの被害であったが。
ノウラの部屋は、水周りは殆ど使えなくなっていた。
「俺は家にいる時間も少ないから、気にしなくていい」
「でも……あ！」
思いついて、ノウラは輝く笑顔を浮かべた。
「では、家の中のお仕事を私が引きうけますね」
「は？」
「掃除とか洗濯とか料理とかなら手伝えます。アリオスさんもお仕事に集中できますし」
「いや、そういうわけには……」
「じゃあ、とりあえず掃除から済ませますね。瓦礫くらいは片付けないと」
アリオスの言葉も半分に、ノウラは早速散らかった、というより荒れた部屋を片付け始めた。
ノウラの雰囲気に押し切られてしまったが、断ろうにも有無を言わさぬ様子。
それに、元々申し出たのは自分の方である。
アリオスはまた、ため息をついた。

ばたん

扉が開き、閉まったかと思うと。
重たい空気が部屋の中に訪れた。
座って剣の手入れをしていたカンラは、手を止めて顔を上げる。

「……アルマ？」

暗い雰囲気を背負い、何時もよりもやる気の感じられない姿に、不思議に思う。
カンラの声に、アルマは口を開いた。

「……やられた」
「何が？」
「仕事、つぶされた」
「……うえぇ！！？」

アルマの言葉に、カンラは持っていた剣を落としそうになるほどの声を上げた。
アルマも咎めはせずに、更に顔色を悪くさせる。
そう、このままではまた、稼ぎが今月分の家賃に足りてないのだ。

「何で！？どして！？」
「爆弾が……」
「爆弾！？お前魔道書解読の手伝いに行ってたんじゃなかったっけ！？」

魔術師は、魔術を使う為に魔道書を読めるようにならなければならない。
そのため、魔道書の翻訳や解読といったことも専門としているのだ。
今回アルマは、街の図書館の依頼で出向いていたはずである。
「図書館が、爆弾魔にやられた。その所為で図書館も魔道書も……仕事も」
「……そりゃあ」
ぼろぼろだ、と。
口元からはもう乾いた笑みしか浮かんでこなかった。
「……どうするか……もう5日もないぜ……」
「こんなときに兎もアンも居ないなんて……」
数日前に遠出した同居人たちを思いながら。
二人は同時にため息をついた。

「なんじゃ、重たい空気なんぞひろげおって」
重い空気の中を軽やかに舞う銀。
飾りをしゃらりとならしながら、レーヴェは窓辺に座っていた。
「どうぞおかえりください……今お客をもてなすなんてとてもできませんので……」
「……本当にどうした、大丈夫かお前達」
「大丈夫、もうすぐ勇者が路頭に迷う様を見れるだけだから」

「……大丈夫じゃないのう、いろいろと」
「しかしそれなら、頼むのはやめておく……うぉ！？」
窓から去ろうとするレーヴェの服のすそを、二人が同時に掴んだ。
反動で落ちそうになり、慌ててレーヴェは振り返る。
「危ないじゃろうが！！」
「仕事！？仕事ですか仕事だよね仕事ですね！？」
「レーヴェ本当空気読めるね、さすが伊達に年食ってないね」
「カンラは落ち着け、アルマはとりあえず年長者に謝れ」
「で、何の仕事？」
「ああ、最近お騒がせの爆弾魔の……？」
途端に大人しくなる。
不思議に思い、レーヴェは二人の顔を見て、驚いた。
「ふ……ふふ……」
「そうか……そうだな……」
「人の生活脅かしてくれた礼は、直接しなきゃあなあ！！」
”いつも”の如く、高らかに笑い声を上げるカンラ。
いつもなら突っ込むアルマまで、同調して妖しい笑みを浮かべている。
（追い詰められると、人は恐ろしいのう）

レーヴェの小さなため息は、誰にも聞こえていなかった。

共同作業

「どうだった？」
「ダメ。少なくとも爆弾の造りは分かったけど」
そう言って、壁に寄りかかっていたギィはアリオスに紙の束を渡す。
これまでの調査状況が細かく記されたそれをめくりつつ、アリオスはため息をついた。
「ギィ、お前はこれを研究室に回せ。探知機の制作を早くしてもらえるようにな」
「了解」
「アレクス班はこのまま街中巡回、ロドリー班は被害状況の調査」
「「は！」」
敬礼し、部屋を出て行く姿を見送り、また息を吐く。
今のところ分かっているのは、爆弾は確実にその手のものが作っていること。
しかしそれ以外は、まったくと言っていいほど無差別であった。
「頑張りすぎはよくないって、まーた口うるさく言われるぜ？」

「そうだな……」

「悪かったわね、口うるさくて」

扉をあけて立っていた女性が、少し不満げにそう言った。
まずい、と苦笑いを浮かべてギィが姿勢を整える。

「エヴァ姐さん、いたんですか」
「居たら悪い？」
「滅相も無いです」
「すまないな、そっちはどうだった？」
「駄目、外には何も無かったわ」

アリオスの元へ近づき、エヴァはそう言ってため息をつく。

「ごめんなさい、応援に来たのにたいしたこともできなくて」
「いや、十分助かっている。こっちこそ、わざわざすまないな」

「そうそう、若手新鋭、世の女性の憧れエヴァ・アスターが来てくれたんだから、十分ですって」

アリオスと同期で同じく部隊長を務めるエヴァ。
騎士団の中にも、女性はいるが割合は少ない。
その中でも、部隊長という位置にいる彼女は有名人である。

「うちの部隊は引き続き外部から調査を進めるわ」
「ああ、頼んだ」
「それより、今日はもう帰るんでしょうね？」

呆れたように、少し怒ったようにエヴァは言った。

腰に手を当てた様子は、さながら母親の様に。

「部隊長なんだから、無茶ばかりはできないのよ？」

その昔。

アリオスもエヴァもまだ新米だった頃。

仕事詰めにより無茶をしたアリオスが、倒れたことがあった。

エヴァが問い詰めたところ、睡眠も食事もろくに取っていなかったらしい。

「大丈夫なんでしょうね？」

「……最近は、問題無い」

「おかえりなさい、丁度食事の準備が終わったところですよ」

鍋をかき混ぜる手を止めて振り返ると、ノウラは微笑んだ。

辺りには温かな空気と、香が漂う。

「今日はシチューにしてみました。夜は少し冷えますから」

上着を脱ぎながら、アリオスはテーブルに並ぶ料理を見る。

家事ならできる、と本人が言っていた通り、料理も得意らしい。

温かなシチューに加え、他にも幾つかの皿が並んでいたが、どれもおいしそうである。

ノウラの部屋が壊れてから数日。

今日もこうして、ノウラはアリオスの分まで家事を引き受けていた。

その為もあってかアリオスは”最近”食事や睡眠をしっかりと取れている。

「毎回悪いな」

「いえ、こちらこそお家を貸してもらってるんですから」

「いつもですけど、お仕事大変そうですね」

「まあ、今は特にな」

食事を口に含みつつ、既に馴れた雑談を交わす。

「すまないな、早くに捕まればお前の部屋も巻き込まれずにすんだ」

「いえ、私の部屋は私の不注意の所為ですし……それよりも」

「？」

「大抵は、人気の無い場所ばかりを狙うんですよね」

「そうだな」

ノウラの家という例外はあったものの。

今まで被害にあった場所は、路地裏や人気の無い角であったり。

また、人の居ない時間帯であったり。

「じゃあきっと、目的は破壊ではなく、何かを伝えるため」
ノウラの言葉に、アリオスは手を止める。
「少なくとも、無駄に被害を広げたいわけではなさそうですね」
「……なるほど」
それなら、人的な被害はあまり広げずに澄むだろう。
しかし、もし目的が何か他の目的の為であるならば。
やはり速めに食い止めるに越したことは無い。
「……何処かの機関に目星をつけてみるか……」
「きっと魔賊では無いですね」
微笑んで言い放ったノウラに、若干呆れながらアリオスはため息をついた。
少なくとも、今回用いられている爆弾には、魔術は用いられていない点からもそういえる。
加えて、魔賊は”知恵のある”機関とは言い難い。
とはいっても、こうはっきり言われると、少し不憫に思わないことも無かった。

「大体は分かった」

渡された資料を読み終え、アルマが顔を上げる。

「データを下に、爆弾の探知くらいならできそう」

「さすがじゃ。探索魔術は魔術師の特権じゃからのう」

「そうなの？」

カンラが不思議そうに尋ねると、アルマが呆れたようにため息をついた。

「確かに魔術の殆どは魔女によってもたらされたものだけど、魔術師だってそれなりに魔術に通じてはいるんだよ」

「……ええと」

「魔女じゃなくても魔術を創ることもできる、ということじゃ。探知魔術や治癒魔術とかじゃな」

アルマの説明に首を傾げるカンラに、レーヴェが付け加えて説明した。

何となく分かったのか、カンラはうなづく。

しかし、ふと疑問に思いまた尋ねた。

「治癒魔術も？」

「ああ……魔女には本来必要がないからのう」

「元の生命力や回復力があるし、薬草に関するプロでもあるし」

「まあ、覚えれば使えはするが」

もっとも、魔女がそれらの魔法を覚えることは殆ど無いとさ

れる。
魔女には魔女の誇りや考えが在る、ということだろう。
それにしても、とアルマが口を開く。
「こっちに仕事が回ってきたってことは、騎士団も手こずってるんだね」
「そうらしい。他所から応援をつれてくるくらいじゃからな」
「でも、何でレーヴェが爆弾？」
どうして調べるのか、という問いに。
レーヴェは何時もの様に笑って見せるだけだった。

十字の鉄槌

「……見つけた」

屈んで覗き込んだ先に見つけた小箱を、そっと掴んで引き出す。

透明な光でそれを包み込む。

「……はい」

「上出来じゃな」

上からふわりと降りてきたレーヴェが、機能しなくなったその箱を受け取る。

開くと、中には機械がつめられている。

「やはり完全に機械の爆弾か……」

「それこの前も言ってたけど……何かあるの？」

「……今の時代、魔術を組み込んだ爆弾が作れる」

「うん？」

「けれど、”これ”はあえて完全に魔術を排除してあるんじゃ」

自分の思い過ごしであればいいのだが。

レーヴェは軽く空を見上げた。

「……続けよう」

「アルマ？」

「全部回収しちゃえば、心配もなくなるよね？」

淡々とした物言いだが、おそらく気遣ってのことだろう。

アルマの言葉に、レーヴェは笑みを返した。

回収した爆弾から、その技術の割り出し。

そして、そこから幾つかの機関に目星をつけての調査。

また、回収したルートから、犯人の足取りと目的を探る。

今日も騎士団は大忙しで動いていた。

（メッセージ、陽動……何にせよ、この爆発自体に何ら効果は無い、か？）

「また、考え事？」

「エヴァか」

「相変わらずね、本当……部隊長になっても変わらないんだから」

そう言って、半ば呆れたように、しかし優しくエヴァは笑っ

た。
昔は短かった栗色の髪も、今はかなり長く、高い位置で一つに縛られている。
「何か報告か？」
「ええ、関係在るかは分からないんだけど……戦闘痕を見つけたわ。強力な魔術による、ね」
「！……魔女、か？」
「可能性は在るけど……でも、だとしたら爆弾とは関係ないかしら」
そう言って、エヴァはため息をついた。
解析した結果、爆弾からは魔術の欠片すら見つかっていない。
アリオスは考えるように口元に手を当てる。
「……仮に魔女だとして、その相手は？」
「え……？」
魔女と騎士団の折り合いは良くは無い、それは事実。
しかし、だからこそ互いに線引きができており、無駄な争いはしないようにしている。
騎士団の要塞があるこの場所では、なおさら、魔女は大人しいことが多い。
それなのに、あえて目立つような行動を取るとは思えなかった。
魔女は、知識が高い集合であるのだから。
「……十字の鉄槌（マレフィカルム）」

「え？」
「排魔主義機関だ。科学の普及と魔術の排除を謳っている」
そして。
「一部で”魔女狩り”をしているとのことだ」
「！！」
魔女狩り。
その名の通り、魔女を狩ることで、その手段は問わない。
排魔を理念とする機関にとって、魔女の存在はもちろん”いらない”ものである。
「魔女狩りだなんて……そう簡単に許されることではないでしょう！？」
「あくまで噂だ」
ただ、今回の事件が彼らと関係するのだとしたら。
考えに至り、アリオスは立ち上がる。
それを見て、エヴァは慌てて引き止める。
「直接話を聴くつもり！？魔女狩りを行ってるかもしれない危ない機関なんでしょ？」
「”白”のほうにだ」
「白？」
「十字の鉄槌には、白と赫と二つの区分がされている」
”白”は、魔の排除と魔女差別を説いている、いわば穏健派。
対して”赫”は、それだけでは出来ない活動を補っている過激派。

”白”は魔を排除する思想は持っているが、強行手段は好んでいない。

「今回の仕業がどちらにしろ、”白”から見れば好ましいことじゃない」

「じゃあ、魔女以外の普通の市民の被害は、少なくとも広がらないと見ていいのね」

そう言って、エヴァは少しだけほっとして息を吐く。

その言葉に、アリオスはふと、立ち止まった。

十字の鉄槌にとって、一般市民は布教の対象であり、寧ろ被害は出したくないはず。

『大抵は、人気の無い場所を狙うんですよね』

そう、例外はあった。

確かに建物も幾つか爆破被害にあってはいるが、古い書庫であったり廃ビルであったり。

確実に人が居ないような場所ばかりであった。

”個人の家”を狙っていたのは、一箇所だけ。

今のところ、一番新しい被害場所。

ノウラの家だけ、だった。

「……この辺りでいいでしょう」

人気の無い場所へやってきたノウラは、そう呟くと振り返った。

そこは、爆弾により破壊された瓦礫の後。

「ここなら、騎士団もすぐにはやってきません」

ノウラの声に答えるように、瓦礫の中から人影が現れた。

魔賊にも似た黒い装束、違う点は、アクセントに入れられている赤い模様。

そして、中心に飾られた十字。

「気づいていたか」

「ええ。最初は、巻き込まれただけだと思ったんですが」

少し俯いたノウラは、かすかに笑いながら呟いた。

「どうやら……巻き込んだ方だったみたいですね」

各地で起こされた爆破が人気が無い場所が多かったのは、他の被害を防ぐ為。

加えて、人気の無い場所にいることが多い者達を”炙り出す”為。

今思えば、廃墟となった建物や魔術書が保管された書庫は、魔女がいる確立が高い場所なのだ。

「そして、目星がついたから直接、狙ったということですね」
「その通りだ、よく分かっているじゃないか」
「追われるのは慣れてますから。特に、貴方達(マレフィカルム)には」
「仕方の無いことだ、”宵待(よいまち)”」

その名を呼ばれたことに、ノウラがぴくりと反応する。
その笑みが、一瞬だけだが引きつるように消えた。
が、またすぐに何時ものように柔らかに微笑みかけた。

「まあ、私もそう生に執着心はないんですが……」

「貴方達の思い通りになるのは、真っ平ごめんです」

時刻は昼を過ぎた頃。
街の一角に、夜が訪れる。

魔女の呪い

男は、魔女が嫌いだった。

聞かされていたのは、魔女の悪行の数々。
見てきたのは、ろくでもない魔術を扱う者たち。

男は、魔術が嫌いだった。

異質な存在を、排除してしまうことの何がいけないのか。
魔術など、元はヒトが持っていなかったもの。
無くなったところで何の問題も無いではないか。
そして、そんなものをヒトに持ち込んだ、魔女も。

十字の鉄槌に入り活動を行いながら、その気持は次第に膨らむばかり。
そして、彼は行動を起こしたのだ。

起こしたのだった。

「もう、いいですか？」

何処からかはわからないが、少し高い位置からその声は聞こえてきた。

気は済んだか、と、疲れたように。

高い位置からなのは、恐らく彼女が立っていて、自分が手と膝を地についているから。

先程までの冷静な表情は、今や焦燥かそれとも別の何かに塗り替えられていた。

時間はまだ昼だったはず。

それなのに、男の視界には、真夜中の暗闇しか映らなかった。

（なん、で……こんな、ことに……）

男は、何が起きたのかを理解できていなかった。

覚えているのは、自分が刃物を持って彼女に襲い掛かったこと。

彼女はそれを避けるそぶりも見せずに、自分の右腕を差し出していたこと。

そして、彼女の腕から、”溢れ出した”こと。

気がつけば、彼の世界は”夜”を迎えていた。

もちろん、本当に夜が訪れたわけではない。

ノウラの瞳には、先程と何ら代わり無い昼の街が存在していた。

ただ、男に”夜が訪れた”だけであって。

「私だけならともかく、周りにも迷惑がかかってるのです。

少し反省してください」

男とは対照的に、ノウラは先程のままの笑みを浮かべて。
まるで子供を諭すかの様な口調。
そう、男を相手にすらしていない。

男の背筋に、何かが通り抜ける。

「う……ウアアァァァ！！！！！！！！」
「！！」

突き出した男のナイフを止めたのは、アリオス。
男に向けてとっさにかざしたノウラの腕を止めたのは、白い衣服に身を包んだ別の男。

「悪いが、これ以上の手出しはやめてもらおうか」
「……”白”もいらっしゃったんですか、以外ですね」
「とりあえず”それ”を止めてくれ。まだ夜が来るには早すぎるんでな」

そう言いながら、ノウラの手を離す。
その白い袖に、黒く染みが広がっていった。

腕に布を巻かれて縛られるのを、ノウラはされるがままにしていた。
流れていた”黒い”ものが、とりあえず止まる。
「俺が来たのはこいつを引取りにだ。あんた達に直接どうこうはしないよ」
「……私達、ですか」
「特にあんたの”呪い”は受けたくないんでね」
男はそう言うと、ノウラから離れる。
「それに、そちらの騎士さんの目もあることだしな」
「……」
アリオスは無言のまま、抑えていた男のナイフを落とす。
そして、男の首に手刀を叩き込むと、倒れたその体を支えた。
「分かってると思うが、そいつの身柄はこっちで引き取らせてもらうぜ」
「……さっさと持って行け」
「こっちでもしかるべき処分はする。騎士団の方にも、後で何らかの謝罪を送るだろうよ」
「いらん。から、騒ぎを起こさないようにしろ」
「俺にいわれてもな」
アリオスは、表情を変えないまま、白服の男に、倒れた男を引き渡す。
ノウラは何も言わずに、腕を押さえてその様子をただ見守っていた。

「それじゃあな。出来れば、もう二度と合わないことを願う」
アリオスに向けてか、ノウラに向けてか。
そういい残して、男はその場を立ち去って言った。
暫く無言が続いた後、ふとノウラがアリオスに視線を向ける。
それを合図にしたように、アリオスが口を開いた。
「十字の鉄槌、”白”のラウル・アーバストだ」
「聞いたことは、あります……だいぶ、幹部の方ですね」
どこか飄々として見えたが、倒れた男とは比べ物にならないほど冷静で理知的。
そして、強いということは分かった。
ノウラのことも、もちろん知っているらしい。
「今回の事件については、機関に任せるようにと、国からの連絡があった」
「……そう、ですか」
十字の鉄槌は、特殊な機関に分類されている。
その為、騎士団との中で幾つかの線引きがされているのだ。
とくに、”魔女”に関しては。
「帰るぞ」
「……え」
ノウラにしては珍しく、あっけに取られた顔をした。
アリオスを見るが、その表情からは上手く思考を読み取れな

い。

「……何も聞かないんですね」

「話は聞く、が、帰ってからだ」

何かを言おうとするも、出てこないのか無言のノウラだったが。

「……こっちは昼も食べて居ないんだが」

「！……じゃあ、急いで用意しないと」

何時もの様に、微笑んだ。

「……」

「気がついたか……つっても、何も見えないだろうが」

担いだ男が目を開いたのに気づき、ラウルは声をかける。

男は、瞳をさまよわせながら、小さく何かを呟いた。

が、それは音とならずに、空気に溶けていく。

「魔女の”呪い”くらい、知ってるだろ」

「……」
「まあ、何の呪いなのかは知らなくても仕方ないがな」
魔女の”呪い”
魔女がもつ特殊能力の様なもの。
魔女の中に流れる”血”によるものであり、その力は一人ずつ違うもの。
そしてその”呪い”は、魔女が畏れられる理由のひとつ。
「……分かっただろう、無闇に行動するものじゃあないってな」
魔女が、魔術が嫌いだった。
嫌いなのは、自分達とは異質だから。
異質なのが、許せないから。
そう、思っていたのに。
「……い、と……」
「？」
今までだって、何度も魔女を”退治”したことがあった。
少し前にも、一人の魔女をこの街から”排除”した。
怖いと思ったことなんて、一度も無かったのに。
あの微笑が、脳裏によみがえる。
何も見えない闇の中で、それが浮かび上がる。
聞いていたラウルは、呆れたようにため息をついた。

「馬鹿か。怖いと思ったことが無けりゃあ、お前、赫にいるわけ無いだろ」

ラウルは見上げる。

空に広がる黒の中には、小さな星屑がきらめいている。

「異質なのが怖いから、排除しようと思ってんだろうが」

何も映っていないだろう男の瞳から、一滴零れ落ちた。

そして魔女は微笑む

夕日が窓から差し込む部屋の中。
作っている料理を味見し、満足げに微笑む。

「……あら」

もっていた小皿を置いて、橙に染まる窓に近づいていく。

「ずいぶんと綺麗ね」

ノウラは素直に感想を述べた。
窓を開けて腰掛けていたレーヴェの銀の髪が、淡く橙に染まっていた。
まるで、夕日に染まった水の綺麗な川の浅瀬の様にきらめいて。

「相変わらず、料理の腕はあるな」
「それは遠まわしに薬作りの腕が無いって言いたいのかしら」
「わかってるようじゃな」
「……そろそろ来るころだとおもってたわ」

中に入ることを促すようにノウラが体の向きを変えたが、レーヴェは笑って首を横に振った。

「すぐ帰るつもりじゃ、遠慮する」
「ご飯くらい食べてくればいいのに」
「あのお堅い騎士殿とご一緒するのはお断りじゃ」
「あら、結構面白くなりそうなのに」

くすくすと笑うノウラをレーヴェは見る。
視線に気づいて、ノウラも見つめ返した。

「で、何処までしゃべった？」
「魔女だということと、私のことを幾つか。レーヴェのことは言わなくてもよかったかな」
「まあ、言わずとも知られとるよ……これでも、心配しとるんじゃ」

相変わらず微笑んでいるノウラに向けて、レーヴェはため息を吐く。
十字の鉄槌が起こした様なことは、何も今回だけではないのだ。

「特に、お前さんは色々と目をつけられとるじゃろう」
「あら、レーヴェだって」
「まあ、暫くは大丈夫じゃろ。頼もしい騎士もいることじゃし」
「……そうね」

今回のことで、十字の鉄槌も少しは大人しくなるはず。
そして、他の排魔主義の者達も、同様に。

「もともと騎士団とは上手くいっとるんじゃ。今回のことも、そう大事にはならん」

「そのようです」
事を起こしたりしなければ、平穏に暮らせるのだ。
そう、たとえ魔女であろうとも。
「だから、村には帰りませんよ？」
「わかっとる。落ち着いたらアルマ達のところにも顔をだせ」
腰を上げながらレーヴェはそう言って、思い出したように付け加えた。
「ついでに治癒術でも習っておけ。どうせ未だに傷薬も作れないんじゃろ」
「失礼な……痛み止めくらいなら」
「……」
「……アルマちゃんにお願いしてみます」
軽く手を上げて、レーヴェは窓からひらりと降りた。

後日。
言われた通りカンラたちへ顔を出しにいったノウラは、その光景を暫く呆然と眺めていた。

机に突っ伏したまま動かないカンラと、その正面で気に留めずに読書をするアルマ。

「……えっと、大丈夫？」

「多分……きっと」

「すみません、ちょっと最近生活に困窮していて」

寝そべって気力の無いカンラに代わり、まだ何とか大丈夫そうなアルマが答える。

レーヴェのお陰で金銭面はぎりぎり何とかなったが、家計が苦しいことには変わりなく。

「えっと、じゃあ丁度良かったかな。造りすぎたスープをおすそ分けに」

「「頂きます！！」」

「ふーん……なんか大変だったんだなあ」

「まあ、少しだけ」

「家の修理はまだなんだろ？」

「ええ、もういっそのことあのままにしておこうかしら」

ノウラは事件のあらましをかいつまんでだけ話した。

スープを胃袋に収めながら、カンラは話を聞いていた。

「兎がいればよかったんだけど……怪我はもういいの？」

「ええ、もう全然。でも、今度良かったら治癒魔術教えても

らおうかな」
「いいよ、ノウラならすぐ覚えられると思う……誰かと違って」
そういわれて動きを止めたのはカンラ。
不思議に思いノウラはカンラを見たが、すぐに、ああ、と手を合わせて。
「カンラ君にも教えたことはあるのね」
「確かに、”教えたこと”はありますね」
「ご馳走様！ノウラ料理上手いな！すっごく上手かった！！」
ごまかすように大きな声で言うカンラを見て、ノウラは笑い。
ため息を吐いたアルマは空になった皿を片付けるために持って立ち上がった。
カンラが差し出した皿も受け取り、一緒に持っていく。
「なあノウラ」
「はい？」
不意に名を呼ばれて、ノウラは振り返る。
目が合うと、カンラはいつもの様な笑みを見せた。
ノウラのそれとはまた違う、輝くような強い笑顔を。
「何かあったら遠慮なく俺たちに仕事持ってきてくれよな」
「え……」
「雑用から大事件まで、何でも請け負ってるから」
「勇者は”みんな”のものだからな」

屈託なんてまったくなかった。
ノウラはふと、眩しさに目を細めそうになる。

「……ええ、ぜひ」
「そしたらこっちも助かりますね、金銭的な意味で」
「まあ、ノウラは友人料金だからお安くしとくぜ？」

やっぱり、私はまだ帰らない。
ここにいる。

ノウラの心は、そう決めた。
そしてまた何時もの様に、笑顔を浮かべて。

「ありがとう」

二人に向かって言った。

探し物

その日、カンラとアルマは仕事を請けて別の街に来ていた。
その街のとある料亭、街の雰囲気に合わせてか、独特の造りをしたそこで。
付け加えるなら、普段は決して入らない、入れない場所。
つまり、”高級”。
「……大丈夫なんだよな？」
「うん……たぶん」
「大丈夫ですよ、費用は私が持ちますから」
そう言って現れたのは、どこか民族風の衣装を纏い微笑む女性。
微笑みながら、ゆっくりとお辞儀をしてみせる。
あたりを見渡し落ち着かない二人は、その言葉にほっとした。
席につき、早速食事に手を伸ばすカンラの掌をつねって止めながらアルマが口を開いた。
「”探し物”に関しての依頼、とのことでしたが」
女性は笑みを浮かべたまま頷いた。

「私達の里では、古くから神獣を祭っているんです」
「神獣？」
「ええ。……竜、です」
竜は、魔物とは違った生物である。
遥か古より存在し、常に他の生物を見守る立場にあったとされる。
いわば、全ての生物の上等にあたる。
ただ、常日頃には姿を現さないものであり、今でも存在しているのかは不明。
それでも、確かに存在したということは事実。
「じゃあ、探し物の”竜の瞳”っていうのも？」
「ええ……といっても、生きた竜から取るわけではなく、昔のものなんですが」
竜の寿命は、少なくとも数百年以上。
その体の一部分であっても、同じように永い時をすごしていく。
途方も無いその時間の概念に、カンラとアルマはほう、と口をあける。
「やっぱり、祭ったりする為に必要なのか？」
「……いえ」
カンラの問いに首を振って。
女性はしばし沈黙し、瞳を閉じた。

「竜の身体の一部は、昔から薬や武器に重宝されてきました」
その鋭い爪は武器に、鱗は防具に。
そしてその血は薬に。
「瞳にも同じように、力が宿っているとされています」
「力……」
「具体的では無いのですが、よく言われているのは”全てを見通す”力を得る、と」
「全てを見る……未来とか？」
そんなかんじだと、女性は頷いた。
そして、その様なものが人の手に渡った場合。
どのように利用されるかはその人にもよるが、嫌な方への考えは尽きることなく多い。
「竜を祭るものとして、彼らの残したものがどう使われるのかも、管理しなければなりません」
「つまり、悪用される前に探し出す、というわけですか」
「……でも、どうして私達に？」
疑問に思った点を、アルマは尋ねた。
”私達”と言うのは、所謂ハロウから仕事を請けている者のこと。
話を聞いていると、どうやら今回の仕事はそれなりに重要物の探索。
普通なら、そう言った仕事はまず国、つまり騎士団に回されることが多い。
「理由は色々言えますが……要は、不仲です」

「なるほど、よくわかります」
女性の答えにそう言ってうなづきながら答えたのはカンラだった。
”神獣を祭る村”の様に、特殊な特定思考を持つ集合体と言うのは、国と対立しやすくもある。
”魔女”にもそう言うことが出来るように。
そしてカンラ自身も、よく体験することであった。
「わかりました、依頼をお引き受けします」
「ありがとうございます、それじゃあ詳しいお話に移しますね」
女性は机の上に一枚の紙を差し出した。
それはこの国周辺までを表示している地図。
そのある一点に、指を差す。
「霊峰ドラグーン」
「名前からしていかにもですね」
「古の竜の棲み処として知られています。同時に、魔物の棲み処でもありますが」
「もしかして魔物が大量に湧くとか」
「確かに数もそこそこ多いのですが」
女性は少し疲れたようにため息をつく。
表情は、依然微笑んだままだが。
「途中、道を塞ぐ魔物の”種族”が、問題でして」

「種族？」
「神獣の、眷属なのです」
神獣である竜に近しい魔物。
神獣を守る者は、倒すことはもちろん手を出すことさえしてはいけないのだ。
例え、自身の身が危険であろうとも。
それが、掟。

「それで、依頼を出したんですね」
「でも、良いのか？神獣の眷属をやっつけても」
「ええ。村の者が手出しできないといっても、危険を感じれば退治を依頼することもあります」

要は、自分たちが直接手を出さなければ良いということ。
掟は古くから守り続けられてきた。
そう簡単に変わることは出来ないが、少しずつ時代に対応させることは出来る。

「おかしいと思うかもしれませんが、古い村ではよくあることなんです」
「なるほど」

カンラは納得してうなづいた。
それまで地図を見ていたアルマが顔を上げる。

「竜の瞳がありそうな場所は、分かってるんですか？」
「ええ、一応目星はついています。その場所までは私が案内します」
「え、でも」

「一応私も武術の心得はありますから」

自分の身は守れるし、眷族以外の魔物であれば戦うことも可能である、と。

女性は拳を作った腕を小さく掲げてみせた。

「それでは、よろしくお願いします」

「じゃあ早速行くか！えっと……」

あ、と女性は口元に手を当てる。

自身の名を名乗るのを忘れていたことに気づいたのだ。

「麒麟と、申します。よろしくお願いしますね、お二人とも」

首を軽くかしげて、満面の笑みでそう告げた。

靄と魔物

薄い靄があたりを覆っているものの、天気が良いお陰か視界はそれほど遮られることは無く。

しかし、普段より足元が悪いのは事実。

「足元には十分に気をつけてくださいね、でないと」

靄に覆われて見えない深い底を見ながら、カンラとアルマは無言で頷いた。

ほぼ人一人しか通ることの出来ない道を渡りながら。

二人を先導するように、麒麟はすいすいと足を進めていく。

「凄いスムーズですね麒麟さん……」

「まあ、うちの村も似たようなものですから」

「ほんとにそれ村なの！？」

「皆修行の一環だと思ってます」

「毎日が修行！？」

げんなりとして、カンラが言うと、麒麟は苦笑いを浮かべた。

「古くから、神獣を守る術として武術が浸透してましたから」

「だから、麒麟さんも武術の嗜みが在るんですね」

「そういうことです。辺鄙な村なので、自衛をしなくてはいけませんから」

辺りの靄がやや薄くなる。
ようやく開けた場所へと出て、カンラは大きく息を吐き出した。
そして、あたりを見渡してみる。
「地図だと、竜の住んでる場所はもう少し先だっけ」
「ええ」
「で、ここは」
アルマは呟くと何処からか分厚い本を取り出して開いた。
「例の魔物が出る場所」
言ったと同時に襲い掛かってきた魔物に向かい、アルマが本をもつ手を向けた。
そして放たれる雷光が、魔物を弾き飛ばす。
「うおあ！？」
「カンラ、そこ危ない」
「先に言えよっ！！！」
「！次、きます！」
戦えない為邪魔にならぬよう後ろに下がった麒麟が叫ぶ。
翼を持った魔物は大きな爪を振り下ろしてきた。
今度はカンラがそれを構えた武器で受け止める。
ガキン

「――――――っぅ……痺、れた」

「大丈夫ですか！？」

「……大丈夫、折れてない」

「剣か！俺は！？」

「それくらいじゃ折れないで、しょ」

麒麟の問いに何故か答えたアルマに、カンラが叫ぶ。

振りかざされた爪を交わしながら、アルマは更に答えた。

叫びながらも痺れる腕を振って感覚を戻しながら、もう一度魔物と退治する。

翼を持ちながらも、鳥というよりは地上の獣の様な姿をした魔獣。

低く唸る声はさながら猛獣。

その四肢についた大きな爪が、地をえぐって再び飛び立つ。

「上からの勢いがあるから力じゃ負けるな……アルマ！」

「……了解」

カンラの呼びかけに、アルマはもう一度本をかざした。

そして軽く眼を閉じる。

「地を穿つ天の咆哮――――」

「っらぁ！！」

静かに言葉を紡ぎだしたアルマと反対方向に、カンラは魔物を押す様に飛び掛った。

先程の様に一撃を食らわないように、攻撃を繰り出し続ける。

真剣なまなざしで見つめる麒麟の横を、不意に風が通った。
それは、アルマを中心とした渦の様に集まる空気の束。

「――――サンドラ」

アルマの言葉が紡ぎ終わるとともに、光と共に放たれあふれた。

同時に屈んだカンラの上を鋭い稲妻が走りぬける。
それは、僅か一瞬のこと。

かすかな唸り声を上げながら、魔物はゆっくりと地に降り立ち、倒れた。

「……大丈夫そうですね」
「はあ……疲れた」

完全に気を失ったのを確かめ、麒麟はほっと笑みをこぼす。
そして、疲れて座り込んだカンラに駆け寄った。

「少し気を回復しましょう」
「お」

そう言って、かざした掌から光がこぼれる。
暫くその光を浴びて、カンラは立ち上がった。
そして、腕や胴を確かめるように動かして。

「……おお、何か楽になった！」
「武術を利用した回復術ですか」
「ええ、よくお分かりで」

「最近それに助けてもらったもので」
本をパタリと閉じて、アルマは周囲を見渡す。
しんとして、物音も聞こえない。
「他には居ないみたい」
「……変ですね、もう2、3対は来るものと思っていたのですが」
麒麟が訝しげに周囲の気配を探る。
あたりにはまだ、白い靄がかかっている。
「……」
「カンラさん？」
「どうしたの、大人しい」
「んー……いやさあ……」
「……何か、嫌な予感すんなあ……」
カンラの呟きは、静かに靄の中に解けて言った。
「ここか」

呟いた人物は、足元の石を踏み潰した。
砂になった石は、風で舞い上がり靄の中に消える。
「見つけたぜぇ？ドラゴンちゃーん」
にやりとした笑みを顔に貼り付けて。
男が見据えた先に、靄の隙間からの光を浴びて。
”それ”は光り輝いた。

爆発的自己紹介

「……これは」
「予感的中かよ……」

疲れたようにため息を吐いて、カンラはあたりを見渡した。
先程先頭を行った場所から更に奥の広間。
沢山の足跡と、崩れた壁の岩。
少し前まで、誰かがここにいて、何かをしていた証。

「……恐らく、噂をかぎつけた何らかの集団でしょう」

荒らされた跡を見つめて、麒麟は笑みを消す。
跡から見て、団体なのは間違いないだろう。
そして、この場所を重点的に調べているということは、その狙いも分かる。

「……急いで先に進みましょう」
「そうだね……カンラ？」
「……あ、うん。何でもない」

周囲にふと感じた気配に、懐かしい感覚を肌に感じて。
ぼーっとしていたカンラは慌てて二人の後を追った。

洞窟の奥へと入り込むにつれて、物音が聞こえ始めた。
3人は足を止め、岩に隠れながら、音の方を確認する。

「！下がって」

麒麟の咄嗟の声に、カンラとアルマは素早く身を引く。
瞬間、そこへ鋭い刃物が飛んできた。

「よお、そこにいる奴……いや3人、出てきな」

隠れても無駄だと判断し、3人は岩陰から出た。
待ち構えていたのは、大柄な男と他数人。
先程投げてきたのと同じものだろう、投げナイフを手元で遊ばせながら。

「残念だったな、今の俺からはどんだけ気配を消したって隠れられねえぜ」
「それは……！？」
「悪いがこれは俺たちが頂いていくぜ！」

男の手の中にある物を見て、麒麟が眼を見開く。
琥珀色をした、丸い宝石の様なそれは、男の手の中で光を受けて反射していた。
硬くもやわらかい雰囲気をしたそれは確かに、”瞳”。
”竜の瞳には全てを見通す力がある”

男がその力を手に入れたかは不明だが、少なくとも通常より”視る”力を得ている様だった。

「貴方達は何者ですか」

「いいだろう……しっかりと聞け！」

「！？」

「何だあ！？」

男が手を振り上げると同時に、大きな音と地響き。

辺りに靄とはまた別の薄い煙。

「宝の匂いを嗅ぎ付けて！」

どん！

「西へ東へ南へ北へ！」

どどん！

「縦横無尽、傍若無人！！」

ばばん！！

「「「我ら、鉤狼(かげろう)団！！」」」

ばーん！！！

「……」
「まあ……」
「資源と熱気の無駄遣い……」

「おいこらテメェら！！もうちょっと反応しやがれ！！」

恐らく専用の爆薬でも用意していたのだろう。
爆発まで利用した、何とも派手な名乗りを。
口をあけて、驚いたというよりは呆れたように見つめるカンラ。

口元に手を当てて微笑む麒麟。
ぼそりと呟いたアルマ。

それぞれの反応に、親玉らしき男が不満げに声を上げた。

「何でそんなに反応薄いんだよ！？」
「いやー、何か違うんだよなあ……」
「何だろう……悪っぽさが足りない気がする……」

考えるカンラの隣で、ちらりと横目にアルマは呟いた。

「盗賊か山賊かその別かは知りませんが、”それ”を渡すわ

けには行きません」
「残念、はずれだ。俺たちは”請負賊（コントラクター）”だ」
「「！！」」
「こんとらくたー……？」

その言葉に反応したのはカンラとアルマ。
その表情が先程までの呆れとは違い、面倒くさい、という顔になる。

「どういった方々なんですか？」
「あー……何ていうか、そのままだな」
「言葉通り、正式に”請け負って”賊行為”を働く者のことです……これが非常に面倒な存在で」

アルマはため息を吐いた。
請負賊が普通の賊と違うのは、自らではなく別の者により請け負って行動している。
そして、その”別の者”というのが、非常に厄介な存在であったりする。

例えばそれが、名のある家柄の者であったり。

「場合によっては国では取り締まれない、認可された賊とみなされます」
「ハロウでは取り締まれるけど、正式な依頼が必要になるんだ」

仕事の依頼内容によっては、一般的には賊行為とみなされないこともある。
公平な機関であっても、その判断は難しいのだ。

「……それは、面倒ですね」

鉤狼団の雇い主が誰かはわからないが、態度からして簡単には捕まえられないのだろう。

そして、それは彼ら自身に関してもも同じ。

「ハロウの仕事だろうが、依頼内容が違う。お前達は手出しできないというわけだ」

竜の瞳の力か、カンラ達の依頼内容も察したのだろう。

男はそう言ってにやりと笑う。

「……構いません、ならば私が」

割って入ったのは、麒麟だった。

「私が、直にお相手しましょう」

「な……」

「国もハロウも、高貴な家柄だろうと、我が”神羅”には関係ありませんから」

にこやかに、そして穏やかに麒麟は言い放つ。

構えたその姿は堂々とし、威圧感さえ感じさせる。

「……面白い、俺たち相手に一人でやろうってのか」

「……」

「……いいだろう」

鉤狼団の面々は武器を構え始める。

「麒麟さん……！？」
「お二人は下がっていてください。仕事は先程、十分していただきましたから」
カンラとアルマの仕事は、竜の瞳を探す際”道を塞ぐ魔物の相手をする”こと。
確かに、依頼の目的は達成している。
「……了解、じゃあ依頼はここで終了だ」
「ええ、ありがとうございます」
「じゃあここからは本業に入らせてもらうぜ？」
「……カンラさん？」
武器を取り出し構えて、カンラはにやりと笑みを浮かべる。
その剣先を男達に向けて。
「依頼抜きで俺たちとやろうってのか？はっ、随分なお人よしだな」
「いんや？ただ本業を行うだけだぜ」
「は？」
「たった今、俺は竜の瞳が”必要”になった」
「え……」
麒麟が張り詰めていた空気が少し緩む。
カンラの意図がわかってか、アルマは少し後ろに下がる。
「勇者の前じゃあ全員平等！国も機関も関係なし！つまりお前らが誰の請負だろうと関係なし！！」

大きな声で言い放ち、びしっ、と指を差す。
指し示されたのは鉤狼団、ではなく。
その手に持たれた、輝くもの。

「と言うわけだ！！その竜の瞳、一旦俺が貰うぜええええ！！！」

「え……！！？」
「なにぃ！！？」

言うが速いか行うが速いか。
カンラは竜の瞳めがけて飛び込んだ。

（……普段から、より悪の姿を見てるから物足りなかったのか……）

袖で口元を覆い、あたりに舞う土煙を払いながら。
先程の疑問が説け、すっきりしたようにアルマは瞳を閉じてため息を吐いた。

どどどど

勢いよく突っ込んだカンラは、次の瞬間には少し高い岩の上に居た。
舞う砂煙がゆっくりと晴れ、その中で咳払いをする男達の姿。
まだ、竜の瞳はその手に握られていた。

「直感が働いたって無駄無駄ぁ！！」
「て、テメェ無茶苦茶すぎるだろ！！？」
「馬鹿者、俺に無茶など無い！！」

「それが既に無茶」

少し離れた別の岩の上に腰掛けてアルマは呟く。
勇者ではない彼女は大っぴらに手を出すことが出来ないからか、傍観を決めたのか。
いつの間にか被害の及ばない位置まで下がって。

「くそ……お前ら、奴を集中して狙え……！」
「余所見をしていていいんですか？」
「ぐ！？」

腕から竜の瞳がこぼれ落ちる。
すかさず反対の手でそれを押さえながら、男は唸った。

「なんだ……！？腕が痺れて……」
「ちょっとだけ仕掛けました……それでも離さないのは、中々の執念ですね」

にこりと、麒麟が浮かべたのは思わず綺麗だと思う微笑み。
しかし、見とれているような状況ではない。
見渡すと、男の部下も数人ほど、痺れたのか腕を押さえてうずくまっていた。
先程カンラと退治している間にやられたのだろう。
男は眉間に皺を寄せて、腕を無理やりに振るった。

「このっ！！」

ひらりと交わして距離をとり着地する。
そして、今度はカンラ。

「っらぁ！！」
「うお！？」

男の、竜の瞳を持つほうの腕めがけて思い切り武器を振り下ろす。
しかし、飛んできたナイフによりそれは防がれた。
投げたであろう鉤狼団の部下は更にまたナイフを構える。

「駄目ですよ、危ないじゃないですか」
「！？」

いつの間にか移動していた麒麟が、男の手元を払ってナイフを落とす。

そして、男の鳩尾に一撃を叩き込んだ。

「くそ、こいつら……」

揃っていないようでかみ合った攻撃の組み合わせに、男は押されていた。

一方でカンラは、戦闘のやりやすさに笑みを深めていた。

「この……ガウル様を舐めるなよ！！」

「っとお！？」

「なんて力技……！」

力任せに、腕を地面に叩きつける。

衝撃に割れた地面が岩を突き出して襲い掛かる。

交わしたカンラと麒麟に、土煙が降りかかった。

「野郎共、ずらかるぞ！！」

「なあっ！？」

「俺たちの目的はこれを持ち帰ることだからな……引くのも云わば一つの道よ！」

「しまった……！？」

岩が崩れたその場所へ、土煙に紛れて移動していた鉤狼団は走り出す。

煙と岩に阻まれ、出遅れた麒麟は思わず声を上げる。

「フハハハハ、逃げるが勝ちってな！！」

高い場所から、男――ガウルは笑い、見下ろした。

見上げて表情を歪めていたカンラはふと気づいて、男の”向こう”の空を見た。

懐かしい、感覚。

「……！！二人とも、岩場の影に入れ！」
「え……」
「カンラ？」
「早く！」

自身も岩場に隠れながら、カンラは叫んだ。
状況をつかめないまま、アルマも麒麟も言われたとおりに動く。

「！う、うわあああああ！！」
「か、頭ぁ！！！」
「！？何だ、どうした！」

部下達の突然の叫びに、男は振り返る。

「……な……あ……！？」

崩れた場所からこぼれる光を遮るような大きな影。
その大きな”羽”は空を隠すように広く、音を立ててゆれて。
その吐息すらも、突風を巻き起こし。

そして、鋭く抉られる様な眼差しが一つ。

「どっ」
「どどど！？」
「どどどどどどどど」

「「「「ドラゴンンンン！！！？？？」」」」

岩場の壁をすり抜けて。
驚愕の叫びが響きわたった。

古の友人

優雅、と言うよりは雄大に羽ばたいていた竜は、岩場に足をかけて留まった。
ゆっくりと、その羽の動きを止める。

『貴様等、我が寝床に何用だ』
「ひ、ひいいっ！？」

一番竜の近くにいた鉤狼団の部下が、尻餅をついてそのまま後ずさる。
それは、恐れというより、畏れ。

「……”本体”もいるなんて、聞いてねえぞ……！」
『！……ほう、なるほどな』

ガウルの小さな呟きを聞き取ってか、竜はそちらへ視線を動かした。
そして、そこにあるものに眼を留める。

『我が”おとしもの”を求め来たか……』
「おとしものって……竜の瞳？」

竜の言葉に、アルマが呟く。

竜の瞳は、依然ガウルの手の中。

『既に落としたものに興味は無いが……無闇にヒトの手に渡すものでもない』

「なっ……」

グオオォォォオオオン

そう言ったかと思うと、竜は突然大きく咆哮した。

その場に居た全員が、その威力と迫力に押しつぶされないように耐える。

しかし、力が抜けたその手から、竜の瞳がこぼれ落ちた。

『去れ。まだ自身を冷静に案じられるのであればな』

ガウルは辺りを見る。

既に部下達は戦意を喪失し、力が抜けたように座り込んでいた。

「……俺も部下を無駄死にさせるようなことはしたくないんでな」

「お前……」

「頭として当然のことだろう？……諦めたわけじゃあねえからな……野郎共！！」

ガウルの大声に、部下達は反応して立ち上がる。

そして次々と、竜のいない方向から、岩場を抜けていった。

最後に抜ける前に、ガウルは立ち止まり、振り返った。

「覚えとけ、しつこく狙っひっかける、それが鉤狼団だ」
そう言って、部下達とともにその場を去っていった。

「……まああれだけのインパクトある名乗り、忘れないよね」
「名前は忘れそうだけどな……っと、そうそう」
カンラは竜の瞳が落ちている場所まで歩き、それをひろった。
色々とあったが、傷などは見当たらない。

「よっし、竜の瞳ゲット！」
「……で、どうするの？」
「ん？んー、そうだなー」

アルマの問いに考えながら歩き、カンラは麒麟の前に立った。
そして。

「手に入れたけど特に必要ないし、管理も大変だし、誰かもらってくれないかなー」
「……私達でよければ、お預かりします」
「お、じゃあ頼むな」
麒麟は微笑むと、差し出された竜の瞳を受け取った。
「これで仕事も完了だな」

「ええ……あ、でも」

麒麟はちらりと目線を動かす。
未だ荘厳に佇む竜へと向けて。

『ふむ……”神羅”のものだな』
「！お分かりですか」
『あの者達は独特の気配を持つからな』
「……お初にお目にかかります。私（わたくし）の名は麒麟、神羅に属するものです」
『ふむ、麒麟とやら』

そう言うと、竜は少し考えるように目を閉じた。

『お前達ならば”それ”を持つことも構わん。もっていくがよい』
「……ありがたく」

麒麟はほっとしたように笑みを和らげると、竜の瞳を掲げるようにしてお辞儀をした。
満足したように竜はうむ、と呟く。

そして、今度はカンラへと視線を向けた。

『久しいな。相変わらずのようだが』
「お互い様だろ？というかお前の眼だったんだな」
「……え、知り合い？」
「ん？ああ」

アルマの呟きに、カンラは当然の如く軽く答えた。

「前に何度か会った事があってな。まあ、俺一応勇者だし」
「それ関係あるの？」
『勇者と我らとは……そうだな、お前達の言う”友人”か』
「……それは、お疲れ様です」
「え、アルマ、それどういうこと？」

「……あの、少し気になることがあるのですが」
『ふむ、何だ？』
麒麟が少し遠慮がちに声をかける。
なにやら言い合っていたカンラとアルマもぴたと言葉を留めた。

「これは……”貴方の”眼なんですね？」
竜の、傷のついた片目を見ながら麒麟は尋ねた。
”一つ”の視線が、麒麟を見つめ返す。
『そうだ』
「……どうして”落とす”ことになったのか、お聞きしても？」
『……我の不注意だ、とだけ言っておこう』
含むように、竜はそう告げた。
有無を言わさぬ、続きを聞けないその雰囲気に、麒麟は尋ね

るのをやめた。

「あの、私も聞きたいことが」

『なんだ？』

今度はアルマが手を上げて尋ねた。

「竜はヒトの言葉を”発する”ことができるんですね？」

『ふむ、その通りだ。厳密に言えば”話す”ことはできない』

一種のテレパシーのようなものだ、と竜は告げた。

なるほど、確かに竜が言葉を放つ際にその口元は動いていない。

『しかし、そうか……』

ふと、竜は視線を動かした。

その視界に、アルマをとらえて。

「？」

『そこの娘、名は何と言う』

「アルマです」

『そうか……』

「？」

竜は、今度はカンラへと視線を向けた。

『……縁があればまた会うだろう、その時はまた、昔話でもしようではないか』

「……だな」

「そうですね」
「私の方も、ぜひお願いします」
軽く手を挙げたカンラに、お辞儀をするアルマと麒麟。
答えるようにうなづいて、竜は体を起こす。
『さらば、ヒトの子らよ』
そう言うと、ゆっくりとその羽を動かしはじめる。
巨大な空気の塊が、羽の動くたびに放たれる。
そして、空気を押し出すように、竜は高く、高く飛び上がった。
その姿は、すぐに青い空の中へと溶けるように消えていった。
た。

「……なんだか、色々とありましたね」
「確かに……」
霊峰の出口。
霞が無くなるあたりまで歩き、カンラは大きく伸びをした。

「ま、とりあえず仕事が無事に終わってよかった」
「ええ……聞いていた通りのお手並みでした」
「え？」

少し先を歩いていた麒麟が、くるりと振り返り、微笑んだ。

「今日は本当にありがとうございました」
「また何かあったらいつでも言って下さい」
「ええ、カンラさん、アルマさん」

たた、と少し駆け出して。
あ、と思い出したように、麒麟はもう一度振り返った。

「……兎によろしくお伝えください」

「「……え？」」

次の瞬間、まるで霞の様に彼女の姿は消えていた。

「ただいまー」
「おー、おかえりー」
「お疲れさん」

兎とアンジェリトが、ソファでそれぞれに本を読みながら出迎える。
お茶請けの煎餅が机の上と兎の口元におかれていた。
カンラとアルマは疲れたようにソファに入り込んで座った。

「うん……疲れた……おもに爆発に」
「爆発？」
「こっちのこと。それより二人の方はどうだったの？」
「ん、なんか……微妙」
「微妙？」

含みのある言い方に、カンラは疑問符を浮かべて首を傾げる。
少し苦笑いを浮かべながら、アンジェリトが答える。

「資料館に入った泥棒の調査だったんだけどさ……」
「なんか、あさった割には何も取って無くてさー」
「……資料館？銀行とか美術館じゃなくて？」
「そ。目的も何もわからないから、とりあえず被害状況とか

だけ」

そう言うと、アンジェリトは大きくため息を吐いた。
ふーん、と相槌を打ちながら、カンラはそこに置かれた資料を軽くぱらぱらとめくる。

そのとき、ふと思い返してアルマが兎を振り返った。

「兎ー」
「んー？」
「よろしく」
「……は？」

意味がわからずに、兎は怪訝な顔を向ける。
気にせずに、机にあった煎餅に手を伸ばし頬張る。
代わりにか、カンラが答えた。

「ああ、なんか今日依頼主が言い残してったやつか」
「え、何それ」

不思議な状況に、アンジェリトも疑問符を浮かべる。
しかし、カンラとアルマも状況を理解はできていなかった。

「どんな人なの？その人」
「麒麟って人」

がたっ

「……兎？」

大きな音を立てて、兎がずり落ちた。

「……今、なんて」

「だから、麒麟って人が、兎によろしくって」

「……その人の外見的特長は」

「全体的に色素の薄い、笑顔の美人さん……あ、あと”しんら”ってとこの人」

何時もより血色の悪い顔色で、兎は引きつった笑みを浮かべている。

「兎？」

「……なんでもない」

「いやその反応でなんでもないわけ無いじゃん」

「何、どうしたの」

「……何て言うか……人類最強？」

「「「「え？」」」」

「お戻りでしたか、麒麟様」

神羅の里。

神獣を祭り守る為、日頃常に己を鍛える”神羅”の民による

その里。

人里離れ隠れたそこで、”長”を努める麒麟は出迎えの侍従

達に笑みを返す。

「ええ、里の様子は？」

「変わりありません。先刻、”機関”からの使者が訪れまし

たが」

「用件は？」

「何時もと同じく」
「じゃあ、私からも何時もの返事を」
「了解しました」
「それと、これを」
”竜の瞳”を渡しながら受け取った侍従はお辞儀をし、そのまま下がった。
ふう、と麒麟は息を吐く。
（瞳の守護は出来た……竜殿との接触は、予定外ではありましたが）
それも、良い出来事だろう。
とにかく、今日は十分な成果が得られた。
”彼ら”のことも含めて。
（どうやら”彼”も、暫くは心配は要らないみたいですね）
ふと、机の上に載った幾つかの封筒に眼をやる。
見覚えのある、高級感のある印が押されたそれを手にとり、また置いた。
「国も相変わらずですね……」
大事なのは”力”では無く”使いかた”。
”何の為”に使うかを、自身が決めることが重要だと、麒麟

は信じている。
だからこそ、武術には姿勢や心構えが必要なのだと。
少なくとも、麒麟は神羅のため――神獣の為にその力を使うと決めている。
”最強”と称されるその力を。
窓から見上げた空は、薄い青みを帯びて広がり続けている。
「……いい天気」
麒麟は呟くと、にこりと穏やかに微笑んだ。

ニャンダフルマジック

魔法。
それは（大体）何でも出来る素敵なこと。

空を飛ぶ。
火をおこす。
傷を治す。

巻き起こすのはまるで奇跡。

そう、例えば。

「目が覚めたら猫になってたりね！！！」

泣きそうなほど笑いながら、否、もう笑いしかこみ上げてこないのか。
目じりに雫を留めて茶色（カンラ）い猫は叫んだ。

「いや本当どういうことなのこれ……」
「……え、えっと……」

ノウラの家。
未だちゃんとした修理はしていないため、隣と繋がったままの部屋。
突然猫と対面させられ相談を受けたノウラは、笑みを浮かべた。
何時もの笑みではなく、苦笑い、だが。
訪れていたのは、カンラ、アルマ、兎、アンジェリトの四人。
否、三人と一匹。

「朝俺がご飯の準備してて」
「私が今日の予定を確認していて」
「俺がそろそろ武器探しに旅立とうと思ってカンラに声をかけに言ったら」
「「「こうなってた」」」
「……」

兎、アルマ、アンジェリトと順にノウラに今朝の出来事を伝える。
しかし、それだけでは何があったのかは分からなかった。
「……恐らくですが、魔法薬だとおもいます」
「魔女が作る？」

「ええ……たぶん、変装用に良く使うものだと」

普段、一般の目から姿を隠す為に、魔女は様々な工夫を凝らすという。

その手段の一つとして、動物などに変身することがある、とのこと。

「カンラさん、何か変わったものを食べたりは？」

「……」

「カンラさん？」

「あ、これ多分心当たり多すぎてわかんねえんだわ」

カンラはノウラから目をそらして何も言わない。

それを見て、非常に落ち着いた様子でお茶をすすりながら兎が言う。

「お前は何でそんなに落ち着いてんの！？他人事！？」

「他人事だよ」

「兎ひどい！？」

「俺だって早く武器探しに行きたいのに」

「アンまで！？」

「……あ、あはは」

「……これ、元に戻りそう？」

「え？そうですね……」

アルマの言葉に、ノウラはもう一度カンラを見る。

茶色のふわりとした長めの毛並みに赤い目。

見た感じでは、おそらくごく普通の猫。

「恐らく戻ると思います」
「……そう……」
戻る、という答えを聞いて、どこか寂しそうな視線を返すアルマ。
不思議に思い、ノウラが首を傾げると。
それを見ていたアンジェリトが、フォローするように答えた。
「アルマ、猫カンラ気に入っちゃったんだよ」
「……それは……」
「……」
「にゃ！おいアルにゃ！やめにゃ！にゃ、にゃ！」
何処から出したのか、猫じゃらしを手に無言のアルマと、それにつられるカンラ（猫）。
その様子はどこかほほえましく、どこか滑稽で。
「このままでも別に大丈夫じゃね？アルマも嬉しそうだし」
「……いやいやいや駄目だって」
「……そ、そうですよ」
兎の言葉に、頷きそうになったアンジェリトとノウラは慌てて首を振り。
「魔法薬ってことは、なんか解毒薬とかがあるとか？」
「解毒といいますか、解除薬が作れないことも無い……ですけど？」
「……何で疑問系なんですかノウラさん？」

アンジェリトの質問に、笑顔のままノウラは視線をそらす。
確かに解除薬は作れないことは無い。
しかし、どんな薬によるものかが分からなければ作るのは難しい。
それに、それ以前の問題もあった。
「……解除薬を作るのは難しいですから」
……ノウラにとっては、であるが。
あえてそこは口に出さずに、ノウラは答えた。
「まずは、どういう経緯でこうなったのかを知らない限りはなんとも……」
「まあ、だよなあ……」
「お前本当面倒なことになりやがって」
「うるさ、お前、こそ、うさぎに、でも、なりゃ！！」
「猫じゃらしにじゃれながら文句言うなよ。あとアルマも程ほどにしろよ」
未だ飽きもせずカンラ（猫）で遊ぶアルマに、兎が注意をする。
相手（アルマ）が聞いているかは怪しいが。
「とりあえず一度きちんとしらべて……」
「おっじゃまー」
「「「「「「！！！！？」」」」」」
唐突に窓辺から聞こえた声に驚き、四人と一匹は振り返った。
窓から身を乗り出すようにして部屋へと入ってきたのは、身

軽そうな男。
みつあみを尻尾の様に揺らしながら、ひょいと部屋の中に入る。
「あ、突然すいません。ここ……てか隣の家の人の部下なんですけど」
「隣？」
「アリオスさんです」
「あーそうそう……ってええ！！？」
ノウラの言葉にもう一度驚いて、アンジェリトは男を見る。
隣がアリオスだということにもだが、目の前の人物が騎士団だということにも驚いた。
青年、というより少年というほうが似合うだろう小柄な姿。
そして、かなり身軽でラフな格好。

「……あ、もしかしてギィさん？」
「あれ、知ってた？」
「アリオスさんの話で少し聞いたことがあります」
「じゃああなたがノウラ嬢か」
それなら話は早い、とギィはにこりと笑ってノウラの手を握った。
「実はノウラ嬢に用があるんだけど」
「私、ですか？」
「うん。アリオスの旦那が、ちょっと手伝って欲しいんだって」

そう言うと、ギィは軽くウィンクをして見せた。

「え……」

「来たか。ご苦労だったな、ギィ」

「いえいえ。それじゃあ俺は情報収集に戻りますんで」

「ああ、頼んだ」

ギィは軽く手を振ると、軽やかに窓から外へと出た。

口元に手を当てて、ノウラはその状況を見つめていた。

ノウラについてきたカンラ（猫）も、ノウラの腕の中で口をあける。

そこには、猫がいた。

数にして7、8匹、そこまで大げさな数ではない。

ないのだが。

珍しく驚いた顔でノウラは尋ねた。

「えっと、アリオスさん」

「何だ」

「ここは、騎士団の詰所、ですよね？」

「そうだ」

「……アリオスさんの頭や腕にいるのは」

「……見ての通り、猫だ」

騎士団詰所で騎士団隊長が猫に囲まれている姿と言うのは、どこか笑みがこぼれるものだった。

「完璧に、猫になってしまってるようですね」

あたりの猫を一通り見終えて、ノウラは呟いた。

猫達は気ままに、窓辺で寛いだりテーブルの上に乗ったり、アリオスの肩に乗ったり。

にゃー、という鳴き声が、合唱の様に聞こえている。

「人間の状態で考えると、とんでもない光景ですね」

「考えないでくれ」

「……原因は、お分かりですか？」

「一応は」

そう言うと、アリオスはなにやら白い箱を差し出した。

ノウラはそっとその箱を受け取り、開く。

開けた箱から、こうばしい匂いが少しの温かさとともにあふれた。

猫の顔をかたどったのだろうそれを見て、ノウラはぽかんと

口をあけた。

「……ビスケット？」

「どうやらこれを食べたものが、猫になったらしい」

「……」

「駄目ですよカンラさん」

そっと伸ばされたカンラの手をノウラはやんわりと握って降ろす。

カンラはひげをうなだれさせて喉をならした。

「……一応聞いておくが、それもか」

「えっと、そうですね」

「それって何だ、俺は物じゃないぞ！？」

「その声、前に……は？」

しゃーっと小さな口を開いておそらく威嚇したカンラを指差したまま、アリオスは止まった。

いつも鋭い目が、驚きで少し丸く見開かれる。

「……」

「……」

「……」

「……」

「ぎにゃあ！？」

「アリオスさん！？」

唐突にカンラの顔をわしづかみにしたアリオスに、カンラは

叫ぶ。
普段見慣れないアリオスの様子に、ノウラも驚いた。
「どうしたんですかアリオスさん！？」
「……すまん、言葉を喋るとは知らなかったもので」
「当たり前だろ！？」
「え、あ……」
そこで、ノウラは理解してカンラを見た。
「？何だよ」
「……喋ってますね」
「喋ってるな」
ノウラは、カンラも城の騎士達と同じく普通の猫になっていると思い込んでいた。
この世界で、普通猫は喋らない。
魔女の変身薬は非常に強力であり、一般人が飲むことを前提には作られていない。
そのため、その一般人が間違って飲んでしまった場合。
「効果が強すぎて、中身まで完璧に動物になってしまいます」
「恐らく、うちの者はそうなったんだろうな」
「そういや、俺普通に喋ってる！」
今頃になって、尻尾をパタパタと振りながらカンラは驚いて言った。
それを見て思わず微笑みながら、ノウラは伝えた。

「恐らくですが、これはカンラさんだからだと思います」
「俺？」
「正確には、勇者だから、でしょうか」
勇者とは職業ではなく、”種族”である。
種族であるということは、他の種族――つまりヒトと違いがあるということ。
魔女と同じように。
「カンラさんは猫になった原因が分からないのであくまで推測ですが」
「有得なくは無いだろう……しかし」
「？」
「……勇者……か……」
「……まあ、言いたいことは分かりますが」
「何だよ！猫で悪いかよ！？」
はあ、とため息を吐きながら、アリオスはノウラの方を向いた。
「まあ、こういう状況だ。魔術及び魔女に詳しいものの協力、そして人手を必要としている」
「アリオスさんのお願いでしたら、喜んでお引き受けします」
屈託の無い笑顔でノウラはすぐさまに答えた。
それを受けて、アリオスはやや表情を和らげてため息を吐く。
そして今度はカンラの方を向いた。

「ついでに、お前も協力してくれるな？」
「おう、いいぞ」
（勇者の喉を鳴らす騎士団隊長、かあ……）
アリオスがカンラの頭にぽん、と手を置く。
頭を撫でられ、カンラは気持よさそうに喉を鳴らす。
その光景に、ノウラは苦笑いをこぼした。
「一応、”無所属魔術師と被害者の協力”という形にさせてもらうが、それでいいな」
「そうしていただけるとこちらも助かります」
「色々在っても面倒だしな」
騎士団側としても、そのほうが都合がいいのだろう。
身分上色々とある二人は、アリオスの案を了承した。
「それじゃあ早速調査を？」
「その前に、こいつ等を何処かに預けたい」
部屋中の猫達（こいつら）を見渡しながら、アリオスが言う。
それに答えたのはカンラだった。
「それなら丁度いいところがあるぞ」

にゃー　　にゃあお
なーお
にゃ
「……」
にゃぁ
にゃー
にゃあ
なお

「……俺アルマの目が輝いてるの初めて見たなあ」
「俺もだ」

兎とアンジェリトは二人並んで呟いた。
視線の先にいるのは、アルマ。
沢山の猫に囲まれ、その様子を眺めている。
その瞳は、言葉通り生き生きとしていた。

「ここなら大丈夫だ。ちゃんと面倒も見てくれるしな」
「……俺の家でもあるのだが」
「大丈夫です、全員責任もってちゃんとお世話します」

「……」

アルマは輝かしい目をアリオスにむけ、真顔で伝える。

アリオスは諦めたようにため息を吐いた。

"猫"の理由

「で、調査ってぶっちゃけ何するの？」
「カンラさん、あまり大きな声をだしては駄目ですよ」

ノウラの肩の上で、伸びをしながらカンラは尋ねた。
3人は現在街中を歩いている。

「猫が喋っては周囲の方が驚いてしまうので」
「わかったにゃ！」
「そういう問題じゃない」
「ふにゃあ！？」
「アリオスさん、顔はやめてあげてください！」

ふう、と息を吐いて、周囲を一度確認しながら。
ノウラは前を向きながら話始めた。

「このクッキーの成分を調べる事と、何故これが出回ったのかをつきとめることが主です」
「情報収集はギィも行っているから、まずは成分調査だな」
「……具体的には何をするんだ？」
「そうですね、科学的な分析は恐らく既に騎士団で行われていると思うのですが」

そう言うと、ノウラはアリオスの方を見る。
視線に気づいて、アリオスは頷いた。

「なので、こちらは魔術的に分析を行おうかと思います」
「にゃるほど」
「まずは広くて人気の無い場所を探す」
「街の外に出たら、カンラさん離れちゃ駄目ですよ？」
「お、おう！」

普段なら全く手こずらない街の外の魔物であっても、今は恐ろしい。
武器を持たない上に、体は小さな猫なのだから。
カンラはノウラの方にしっかりと捕まった。

「ここでいいか」

街から離れた広い場所で、剣を納めながらアリオスは言った。
周囲の魔物も片付けた為、暫くは心配も要らない。

「周囲は俺が見張っている。始めていいぞ」
「はい、よろしくお願いします」
笑顔でうなづくと、ノウラは懐から羽ペンを取り出した。
そして、地面に向かい何やら紋様を描く。
そして、その上に例の白い箱―ビスケットを置いた。
「――”我は汝を知る”」
ぼう、と、辺りに薄い光が現れる。
霧の様に光は広がり、一瞬周囲を覆った。
「うお」
下から風が吹き、慌ててカンラは声を上げる。
しっかりとしがみついたのを見て、ノウラはにこりと微笑んだ。
「”大地よりの雨　空の森　鳥の鱗　魚の足”」
風が渦を巻くように吹き、光は次第に紋様の中心へと集まる。
ゆっくりと、ノウラは手をかざす。
「”生まれいでよ屍の子”」
パチン

はじける音と、フラッシュ。
思わず瞑った目をゆっくりとカンラは開いた。
光に包まれるように宙に浮かんだ、濃い紫色の紋様。
「……何だこれ」
「このビスケットに入れられてた”魔術”です」
そう言うとノウラは、ふう、と大きく息を吐き出した。
結構な力を使ったのか、額にはうっすらと汗が滲んでいる。
「それで魔術を解けないのか？」
「それはちょっと。けれど、どんな薬かや創ったも者のクセが分かります」
「なるほど、十分だ」
「やはり予想通り変身薬ではあるようですが……これは……」
少し顔をゆがめてノウラは呟いた。
「どうした？」
何かを考えるように黙ったノウラに、アリオスは尋ねた。
少し間をおいて、ノウラは答える。
「……これ、本当にただ猫に変化するためだけの効果しか含まれていないようなんです」
「愉快犯の可能性もある、か」
「レーヴェの様な楽しいこと好きの性格の持ち主なら、あるいは」
「まあ、あいつなら俺らを実験台にする程度でとどめるだろ

うけど」

ここにはいない銀色の魔女の姿を思い浮かべながら、カンラは呟いた。

「レーヴェがいたら、もう少し色々と分かりそうなんだけど……」

「思った以上に手がかりが少ないか」

「ええ。かなり高度な魔術を使っているので、魔女の仕業というのは間違いないと思いますが」

「見せ掛けというのは考えられないか？」

「魔賊（マギ）だったら手に入れた薬を簡単に手放すとは思えませんし」

魔法薬は魔術とは違い、魔女にしか作ることが出来ないもの。創り方や材料はもちろんだが、その製造方法にも魔女独自の秘術があるらしい。

その為、裏で魔女の薬が出回った場合、かなりの高値で取引される。

尤も出回るのは傷薬などで、その他様々の効果を持つ物は殆ど一般には手に入らないのだが。

「十字の鉄槌（マレフィカルム）であるならば、魔女の薬を使うことすら嫌悪するでしょう」

「確かに」

「それに、悪事を押し付けるまでもないですから」

そう言って、ノウラは微笑んだ。

魔女に対して良く無い感情を持つ物は、十字の鉄槌に限られない。
表に出さなくとも、魔女を恐れているものは数多い。
そうでなければ、そのような機関が出来ることも無い。

「実際自分の利益のために好き勝手する者もいますし」
「心当たりはあるか？」
「いえ、猫を増やすような人は残念ながら……」

「猫は？」

「え？」

ふとカンラが問いかけた。

「猫を使う魔術とか、薬とか、無いのか？」
「あります。この猫に変身するのも、猫の髭を使います」
「他には？なんか、珍しいものはあるか？」
「珍しいもの？……あ」

思いついて、ノウラは口元を押さえた。

「何か気づいたのか」
「……魔術薬に猫の髭や爪を使うことはよくあるんですが……珍しいものだと、ひとつ」
「何だ？」
「……オッドアイです」

例えば、右が金で左が青。
両目の色が違うものを、オッドアイと呼ぶ。

その両目の違いには不思議な力が宿るとされている。
しかし、オッドアイは珍しいものであり、多くは存在はしない。
「確かに沢山の猫を創れば、その中に見つかるかもしれん」
「オッドアイは希少ですから、普通に探すよりも見つかりやすいかもしれません」
「オッドアイを使えば、どんな薬が作れるんだ？」
「……簡単に言うと、睡眠薬です」
思っていたより普通の薬のようで、カンラとアリオスは拍子抜けする。
しかし、少し口ごもりながらノウラは続けた。
「ただし、魔女用の」
「魔女用？」
「効果はおよそ、１００から２００年です」
「「！！」」
「……魔女にとっては不思議じゃない長さかもしれないが」
「魔女だってもちろん滅多に使いません。材料も貴重ですし、創るのはかなり難しいですから」
「何の為に使うのか、聞いてもいいか？」
「……”封印”する為、です。これ以上は言えません、こちらにも事情がありますから」
「……分かった。が、そんな薬を作る材料を大量に作られても困る」

アリオスの言葉に、カンラもノウラもうなづく。

「カンラさんや騎士団の方のほかにも、猫になっている方がいる可能性があります」

「一度街まで戻る。それから、オッドアイの猫を探すんだ」

狙いがオッドアイだとすれば、オッドアイの猫の所へ訪れるはず。

そこが狙い目である、と考えたのだ。

「大変かもしれませんが……」

「？どうした……」

「？」

ノウラとアリオスが、じっとカンラを見た。

訳が分からず、カンラは首を傾げる。

「カンラさんが猫になったのって、もしかして」

呟いたノウラの言葉に、カンラはもう一度、首をかしげた。

猫だから

「いかがかなー？あまーいお菓子はいかがかなー！」

まるで絵本の中から飛び出したかのような色合い。

そんな衣装とかごの中の大量の包み。

惹かれるように、人が集まる。

「ふたつください！弟の分ももらっていい？」

「おやおや僕、弟思いでえらいね！」

「えへへ」

「そんな君にはサービスしておまけだよ！皆で食べるんだよ」

そう言うと、深くかぶった帽子の下で、にこりと笑った。

「お帰りなさい」
戻ってきた三人を、アルマは出迎える。
大量の猫に囲まれた状態で。
「留守番ありがとうございました」
「ううん、お礼をいうのはこっちの方」
生き生きとした表情で、アルマは笑う。
「……お前、このまま猫でいるほうがアルマの為なんじゃないか？」
「……」
兎の言葉に、カンラは言葉を返せず詰まった。
猫好きだということは知っていたが、ここまでだとは。
何時もの死んだような瞳は何処へやら。

「……騎士さん達には、オッド・アイはいないようですね」
「変わりは無かったか」
「アンが買い物に出かけたのと、あのギィって人が尋ねてきた以外は特に」
「買い物？」
「出発がずれそうだから、列車の切符の買い替えだって」
そう言いながら、兎はアリオスに小さなメモを渡した。
受け取り、開いたアリオスはその中身を読んで。

「……街の方で、何人か行方不明者が出始めているらしい」
「急がないといけませんね……アルマちゃん」
「？」

呼びかけられ、猫を抱えたままアルマはノウラの方を向いた。

「この街の猫について詳しいですか？」
「一通りは把握してる」
「さすがです」

ノウラは、アルマに今回の事件について分かり始めたことを伝えた。
そして、オッド・アイの猫について尋ねた。

「オッド・アイの猫……は、さすがに見たこと無い」
「では、このあたりの猫の”まとめ役”は、知ってますか？」

猫のことは猫にたずねるのが一番。
そう考えたとき、ノウラはふと気づいたのだった。

カンラは今、猫になっているのである。

「もしかしたら、カンラさんなら猫と意志の疎通が出来るかもしれません」
「！そういうこと」
「この辺りのボスなら、知ってる」

「あの子」

アルマが見上げた先に視線を向ける。
そこには、少し長い毛並みの、ふわりとした猫が寛いでいた。
一見上品そうに見えながら、かもし出すオーラはまさにボス、と言った感じである。
三日月形の額の傷も、威厳を感じさせた。

「それじゃあカンラさん」
「おう」

ひょい、とカンラは、その猫のいる塀へと乗り移る。
そして、猫の正面に行き。

『ちょっといいか？』

普通に喋るのとは違い、言いたいことを浮かべながら、カンラは念じるように声を発した。

『ん、お前このあたりじゃ見かけない奴だな。また新入りか？』

「通じた！」
「「「！！」」」
驚きながらも、やはり、という顔をして。
アリオスは、カンラに続けるように無言で促した。
カンラも了承してうなづく。
『なあ、このあたりで片目の色が違う奴、知らないか？探してるんだ』
『片目の？……聞いてどうするんだ？』
『え』
少し落ちた、実際にはにゃあ、なのでおちた様に感じる声のトーンと鋭い眼光。
カンラは困ったように、ノウラたちを振り返り、説明する。
「アリオスさん、彼らも立派な関係者ですから、事情をお話してもいいですよね？」
「ああ。今は言葉通り猫の手も借りたい状態なんでな」
ノウラはカンラに向かい合図を出した。
それを見て、カンラは口を開いた。
『狙われてるんだ、オッド・アイの猫が』
カンラは今回の事件のあらましを伝える。
傷のある猫は、その話を無言のままに聴いていた。
『こういうわけだ。このままだと猫にも人にも被害が出る。

協力してくれないか？』
『……事情は分かった。道理で見慣れないやつが増えるわけだ』
ふう、とため息を吐いて、傷の猫はしばし考えるように黙った。
そして、その眼差しをまたカンラへと向ける。

『知ったところで、お前はどうするんだ？』
『オッド・アイの猫の元に、犯人は必ず現れる。そいつを捕まえて、やめさせる』
『出来るのか？』
『やるんだよ』

尋ねられて、間髪いれずにカンラは答えた。
猫になっても変わらない、真っ直ぐなカンラの瞳が、傷の猫をすっと見つめる。
しばし沈黙が続き、ノウラたちもその様子を見守る。
ふっと、傷の猫はその眼光を緩める。

『いいだろう』
『！！何処にいるか分かるのか！？』
『俺を誰だと思ってやがる。自分のシマの事くらい把握済みだ』
傷の猫はすっと体を起こすと、尻尾を伸ばしながら遠くを見た。

『あそこにあるアパートが見えるだろ』
『ああ、あのレンガ造りの』
『最近来た連中は記憶も曖昧でな、殆どあそこにまとめてる。その中に、オッドアイを見かけた』
『本当か！？』
『珍しいことぐらい自分達でも知ってるさ』

見つかると面倒なことになると予期していたのだろう。
事前に匿っていたらしい。

『人間じゃあ入れないが、お前なら入れるだろ』
『助かるけど、いいのか？』
『お前は信用に値すると見た。元が人間でも今は俺たちと同じだ。早く戻してやってくれ』
『ありがとな！ええと……』

『……ミカゲツだ。と言っても、そこのお嬢さんがつけてくれた呼び名だがな』

そういうと、ミカゲツは視線を動かす。
視線を追ったその先には、アルマの姿。

『お前、人間と言葉通じるんだろ？だったら、伝えといてやってくれ』

「と、いうことだ」
「なるほど、まとめ役なだけあって賢いな」
「さっそく行ってみましょう」

「それと、アルマに伝言」
「私？」

歩き出そうとしていたアルマは振り返る。
そこへ向かって、カンラは塀からぴょんと降りてアルマに抱えられた。

「お前、あいつに名前付けてたんだな」
「うん、見かけた猫には全部」
「全部！？」
「でも、あの子は中々触らせてくれない」

少しがっかりしたような表情でアルマは呟いた。
それを見て、なるほど、と思いながらカンラは言った。

「ミカゲツ、”上手いミルクでも持ってきてくれるんなら、撫でてもいい”ってさ」
「！！！仕事終わったらすぐにに行かなくちゃ……！」
「……普段もこの半分輝いてたらなあ」

またもきらきらと輝き始めたアルマの瞳。
カンラはため息を吐きながらも、喉を鳴らしておいた。

理解と適応

「ここじゃないか？」

レンガ造りのアパートの一階空き部屋。
匿えるとしたらここだろうが、扉には鍵が掛かっていた。

「どうするの？壊す？」
「何故第一選択がそれなんだ」

アルマの言葉に、アリオスはため息をつく。
気づいたように、ノウラはカンラを振り返った。

「そういえば、人間は入れないと言ってませんでしたか？」
「そういやそんなこと言ってたな」
「……あれじゃないか？」

アリオスの言葉に全員が視線を動かす。
そこには、レンガがひび割れてできた隙間。
人間はもちろん入れない大きさ。

「……カンラ」
「え、いやでも」
「カンラ」
「いってきまーす」

猫であってもカンラには厳しいアルマの圧力に、カンラは大人しく従うことにした。
小さな隙間だが、小さく、また柔軟な猫の姿なら入れるだろう。

「中に入ったら、内側から鍵を開けてくれ」
「……この姿じゃ無理じゃね？」
「危なかったらすぐ鳴くんだよ？」
「お前俺には厳しいけど猫には優しいな」

ぶつぶつといいながら、カンラは小さな穴へと頭から入っていた。

「っと……案外中は広いな……！？」

辺りを見渡し、カンラは目を見開く。

中には、ミカゲツが言っていた通り猫がいた。
そして、もう一人。

「おや、もう一匹いたんだ」

魔女。

相手のことを知っているわけではない。
魔女を探知できるわけでもない。

けれど、相手がそうだと、カンラは確信した。

絵本に出てくるような、典型的な魔女に似た、大きな帽子。
レーヴェやノウラとはまた違った意味で目立つだろう、色鮮やかな服。
そして、これまた色鮮やかな、髪。

そんな彼女が何も無い空中にふわりと浮いたままでいるのを見て。

「んー、君は違うんだな、ざーんねん」
「！」

いつの間にか目の前に来ていた姿に驚きつつも、怪しまれないように声を抑える。

緊張でか、少し毛が逆立っていた。

「どっちかはわかんないけど、ラッキーだったね、君」

そう言って、満面の笑みを浮かべ立ち上がる。

そして歩いていった先にいたのは。

（！！両目の色が、違う……！！）

遠めから見ても分かる、右は金、左は青の瞳。

カンラと同じように毛を逆立てた白い猫が、そこにいた。

「さてと、それじゃあ早速」

そう言うと、魔女は食事に使うような小さなナイフを取り出して。

そして、それをゆっくりと猫の青い瞳に。

「やめろっ！！」

突き刺さすその前に、そのナイフはからんと音をたてて落ちた。

魔女は引っかき傷の出来た手を見て、それからカンラへと目をむける。

「……へえ、私が探してるのとは違うけど、君も変わってるみたいだね」

笑みを浮かべながら、落ちたナイフを拾い上げた。
そして、口元にそれをかざす。
「お前だな、人を猫に変えてる魔女は」
「別に、猫を増やしたいわけじゃないよ。薬の効果は暫くしたら切れるように作ってあるし」
指の様にナイフを振りながら、魔女は答える。
そして、ただし、と付け加えて。
「猫であるときについた傷や無くしたものまでは、元に戻らないけどね」
「！！！」
その言葉に驚いた隙を疲れ、カンラに向かい魔女は軽く指を鳴らす。
カンラの体は、まるで縛られたように動かなくなった。
束縛する魔術である。
「しま……っ！？」
「ところで、君は一体何だろうね？あの薬は完璧なんだけど」
近づきながら、魔女はナイフを手の中で器用に操る。
その切っ先が、カンラに向いた。
「イレギュラーがいるんなら、ちゃんと調べてかないとね」
「……！！」

まるでおもちゃを見つけた子供の様な。
そんな笑みを浮かべている。
それは、無邪気ともいえるほど。

それを見て、カンラは納得したように目を閉じた。
その頬に、ナイフの刃が当たる感触を感じながら。

「威勢がいいだけじゃなく潔いみたいだね」
「そうでもないさ。ただ」
「？」

「理解しただけだ」

辺りを覆うように広がった光が消えて暫く。
ようやく開けることの出来た目で、魔女は辺りを見渡す。
未だくらむ視界の中に、その存在を確認して。
「……一体、何者？」

少しだけ驚いたような顔をして、それでも好奇の目の輝きをして。

息を呑むように呟いた魔女に向かって。

光が薄れ、はっきりとしはじめた中に現れたその姿で。

「勇者だ」

……

二本の足で立ち上がったカンラは、白い猫を抱きかかえてそう告げた。

「……なるほど、勇者様ならイレギュラーになってもおかしく無いか」

驚いていた表情を次第に元に戻しながら、魔女は呟いた。

視線を外さずに、カンラは猫を離す。

走り出した猫は、カンラが入ってきた隙間から外へと出て行った。

「……逃げられちゃった」

「生きたまま目をくりぬくのは駄目だ。元が猫だろうとヒトだろうと、な」

「へえ、ヒトだけじゃなくて猫にも優しいのね」

「そりゃあ「猫好きだから」」

え、と振り返るカンラに、ゆっくりとだが伸びた腕がぶつかった。

勢いで倒れたカンラが見上げた先には、先程の声の主、アルマがいた。

「当然、でしょ？」

「……いや猫は好きだけども」

起き上がったカンラの頭を、またも襲う腕。
次は倒れずに、カンラは頭を抑えて振り返る。
眉間に皺をいつも異常に寄せたアリオスがそこにいた。

「まず鍵を開けろと言っただろうが」
「あ」
「俺が来なかったら強行手段に出る世ころだったんだからねー」

そう言って細い金属の針の様なものを回しながら、アリオスの部下、ギィは笑った。
どうやらカンラが中に入った後に合流したらしい。

部屋の中には、6人。

「賑やかになっちゃったなー」

そう言いながら、魔女はその場――何も無い空中に腰掛けた。
ふわふわと揺れながら、にこり、否、にやりと、笑う。

ノウラは、少し目を細めてその姿を見た。

「……”甘授（かんじゅ）”ですね」
「正解！さすがに分かっちゃったか、”宵闇”さん」

「知り合いか？」
「いえ、ですが名前は有名です。私達の間では」

「知らない方もいるようだし？一応名乗っておきましょうか」
中に浮いたまま、座っていた腰を上げて。
魔女はにこりと笑うと帽子のつばに手をかけた。
「”甘授”レリア、魔術薬専門の薬師よ」
「彼女の薬は法外な値段ですが確かな効果から多くの魔女が求めると言われています」
「失礼しちゃう。ちゃーんと材料や効能を考えた結果のお値段よ」
「……魔女には魔女の商売があるのだろう」
アリオスはそう言うとため息を吐いた。
「別に口出しするつもりは無いし、倫理を問うつもりも無い」
「まあ、確かに。猫は良くて人は駄目、なんて変だよな」
アリオスの言葉にギィはうなづく。
騎士団は、出来るだけ魔女との干渉を避けている。
それは折り合いの良く無さから来る軋みを避けるため。
実際のところは面倒ごとを避けるためでもあるのだが。
直接干渉されない限り、こちらからの干渉も出来ない、と言うことである。
「が、この街を荒らすのはやめてもらおうか」
それも、街を荒らすのであれば別。

騎士団は町を守るためにあるのだから、魔女であっても剣を向けることが出来る。

「魔女と勇者を連れてるからどんな愉快な騎士様かと思ったけど、評判どおり真面目なことで」

「仕事だからな」

剣を抜き、その先をレリアへと向けて。

鋭いアリオスの眼光を受けながらも、レリアは笑う。

「ここは魔女に優しいからね、出入り自由で行動制限も無いし。”赫”には絡まれやすいけど」

「その通りだが、ここにいる以上大人しくしなくてはならないことが分からない頭じゃないだろう」

「そうね、騎士団にまで”お菓子”を配っちゃったのはちょっと駄目だったわ。お陰で見つかっちゃったし」

そう言うと、レリアは視線をアリオスからノウラに移した。

「しかも宵闇さんまで出てきちゃうとはね。国に肩入れしてるとは知らなかったわ」

「そういうつもりは一切ありません。私はただ、友人の手助けをしたまでですから」

二人とも笑みを浮かべて向かい合う。

ただし、二つの笑みは、別の表情であるかのように違っていた。

妖しく口元を上げるレリア。

目を細めて穏やかに微笑むノウラ。

「材料を集める大変さくらいは、作る腕に関係なく分かるでしょ？」
「それ以前に材料の乱獲は”私達”の間でも自粛すべきことでしょう？」
「……なんか、ピリピリしてる……」
「笑顔っていうのがまた、怖いね」
普段穏やかなノウラを見ているから余計にか、この状況に周囲の空気は張り詰めて感じられた。
笑顔が、よりその雰囲気を強張らせている。

「仕方ないじゃん、これから沢山必要になるんだからさ、この薬が」
「それは、どういう……」
「おっと、ここまで。これ以上は企業秘密よ」
口元に指を当てて笑みを深める。
そして、ゆっくりと浮いている高さを上げた。
「逃げる気か」
「見つかっちゃったし、それに腕利きの騎士と”宵待”、加えて勇者もいるわけだしね」
もうちょっと遊んでもいいけど、と笑いながらレリアは空中で立ち上がった。
既に、ほぼ首を真上に上げなければ見えない位置である。

「それにまた別の方法でこれから一稼ぎしなきゃいけないし」
「……」
アリオスは剣を向けてはいるものの動かない。
魔女がこの街から立ち去ると言うのだ。
それをわざわざ止めるような行為はしない。
否、出来ない。
とらえたところで、罰することも難しいだろう。
「……」
一部始終を見ていたアルマが、ノウラの袖を軽く引っ張った。
それに気づき、ノウラは横を向く。
「アルマちゃん？」
「因みに、例の睡眠薬の値段は？」
「え？……そうですね、とりあえず城が買えます」
「「！！！？」」
ノウラの言葉に、アルマと、話が聞こえたカンラが勢いよく振り返った。
城。
家、ではなく、城。
それはつまり、家よりも値が高く。
借家など、比べるまでも無く。

その城を、薬ひとつで。

「ん？……え、ちょ！？」

突然襲い掛かった剣に、レリアはその場を離れ後ろへと下がる。

が、そこへ今度は鋭い雷が襲い掛かり、かわしたことで地に足をつけた。

「ちょっとちょっと！危ないじゃないの！」

レリアが声を上げて講義するが、返事は無い。

代わりに帰ってきたのは飛び掛り攻撃。

「うわわ！！？」

唐突な出来事に、出遅れたアリオスとノウラはただ様子を見て口をあけていた。

先程投げ飛ばした剣を掴んで、カンラは攻撃を続ける。

その隙間隙間で、アルマは小声で淡々と詠唱を続け、ただただ魔術を放つ。

「ちょっと！君たち何なのさ！？」

「しばく。とりあえずしばく」

「そういうあくどい商売は気に入りません。非常に気に入りません」

「ええ！？」

「睡眠薬が家一軒だあ！！？しかもそれを大量生産だあ！！？」

「寝言は寝て言うものですよ」

「俺らがどれだけジリ貧してると思ってんだ！？」

「こっちは未だに借家住まいで、今月だって家賃の取立てが迫ってるのにこの事件！！」

「「罰（ばち）が当たれ！！」」

「……勇者も色々大変なんだね」

「「……」」

見つめながらギィが小さく呟いた言葉に、ノウラとアリオスは黙ったまま。

というより、言葉が出ないようであった。

ノウラは苦笑いを浮かべ、アリオスはため息も出ないのか顔に手を当てて。

「ちょっとちょっと！材料も手に入れらんなかったのに、こんなの割りに合わないって！？」

慌てて急上昇し、体勢を立て直すように動く。

そして、懐から小瓶をひとつ取り出し、その蓋を外した。

「！！」

「煙幕……？」
「あーもう！この薬だって高いのに……もったいない！」
そういいながらもレリアは小瓶の中身を振りまいた。
きらきらとした粒の紛れた煙が、あたりに広がる。
「この損害はちゃーんと払ってもらうからね！！」
パチン、と軽く指を鳴らす。
と同時に、あたりの煙の中に紛れたきらきらとした粒が、はじけた。
「あ、まずい」
「！！」
「うわ！？」
ぱちんぱちん、とはじけ続け。
ようやく収まった頃、煙も引いていった。
「けほっ……な、なんだったんだ……」
「普通は目覚め薬に使うものを改良して、逃走用にしたみたいですね……こほこほ」
「の、のどが……」
痺れと煙の所為で痛む喉を咳き込ませながら。
全員周囲を見渡してみる。
既にレリアの姿は無かった。
「……これ、何も解決して無くない？」

アルマの呟きに、はっとする。

「そういや、俺は戻ったけど……」

「他の方は効果が切れるのを待つほか無いですね……そう長くは無いと思うんですが」

「……とにかく、一度こちらで保護する必要があるな」

「ええーまた仕事ー！？」

アリオスの言葉に、ギィが文句ありげな声を上げる。

しかし、やらなければならないことなので、諦めてかうなだれた。

「まあ、彼らの目は守られたことですし、これ以上の被害も出ないと思います」

「とにかく一度帰ろう……喉痛いし」

「兎辺りに薬湯でも作ってもらうかー」

その後、未だ猫化が直りきっていなかったカンラの舌が、薬湯に泣くことになるのだが。

食後には甘いものを

「状況適合？」

自分達の家に戻り、ようやく一息ついたところで。

兎の作った薬湯を、ふうと息で覚ましながら、アルマは呟いた。

向かいに座っていたアンジェリトが、そう、とうなづいて答える。

「周囲で何か異変や問題が起きた時、それにあわせて自分自身が色々と変わるんだ」

「猫にも？」

「今回の場合は、その魔女の薬の効果に適合した、って感じだな」

「……確かに、それでノウラの所にいったり猫の話を聞けたりしたけど」

それは、問題解決に確かに貢献した出来事ではある。

アルマは視線を窓際に寝転がっているカンラに向けた。

猫から戻っても暫くは感覚が残るらしく。

猫舌に泣いた後は、ずっと日向ぼっこをしている。

「……じゃまくせぇ」
「ふぎゃ！？」
兎がカンラを足蹴にしたのを横目に、アルマはアンジェリトに向き直る。
「アンは勇者に詳しいね」
「まあ、聖剣について調べてたから、一通りの文献とかは読んだしな」
「そっか。そういえば最初もそんなこと言ってたっけ」
カンラ、アルマとアンジェリトが出会ったきっかけは、”勇者”そして”聖剣”。
まだカンラとアルマが今の街に来る前に旅をしていた頃。
聖剣にまつわる場所をたまたま訪れたところ、出会ったのであった。
「で、半ば押しかけたんだよな、俺が」
「でも助かった。アンは道具とか旅に詳しいから」
「俺としては二人の知識の少なさに驚いたんだが。よくあれで旅ができてたな……」
「そこはほら、根性」
「らしいけどさ……」
淡々と言ったアルマに、苦笑いを向けながら。
アンジェリトは、一息置いて尋ねた。
「今までにもこういうことは無かったのか？アルマが一番付き合い古いよな」

「……うん」

アンジェリトの問いに、アルマは小さくうなづく。
そして、またカンラの方を見て。

体を起こし、兎と何時もの様に言い合っている。
何時もの、カンラ。

「私と出合った時、もう、特に勇者は必要ない世界になったから」

「……アルマとカンラ、ってさ。どうやって知り合ったんだ？」

「知りたい？」

アルマの瞳が、アンジェリトの瞳と真っ直ぐに繋がる。
輝きは無い（言ってしまえば生気の無いような）目だが、それは真っ直ぐと、そして澄んだ瞳。
思わずこちらが目をそらしそうになるほどの視線に、アンジェリトは返事が出来なかった。

「アルマーちょっと手伝ってー」
「おっけー」
「え、ちょっと2対1は酷いって！！？」
「……程ほどにしとけよー」

兎に呼ばれ、外れたアルマの視線に、ほっと息を吐いて。
アンジェリトはその背中に声をかけた。

「……」

鍋をかき混ぜる手を止めて、ノウラは俯いていた。

『これから沢山必要になるんだからさ、この薬が』

帰ってからずっと考えているのは、レリアの言っていた言葉。

あの睡眠薬は、対象を封印にも近い形で眠らせる為に本来存在するもの。

魔女や、その他長寿の生物、肉体維持を施せば普通のヒトにも。

滅多に使うものではない。

「……あ」

吹き零れた鍋に気づき、慌てて火を止める。
こぼれた部分を吹きながら、小さくため息を吐いた。

今回のことで魔女側がどうするのかは、今は分からない。
流石に行き過ぎた行為だとは思うが、レリアの存在は魔女にとって大きい。
元々集団を好む性質ではないし、注意はあっても処罰はあるはずも無い。

ただ、少なくとも国は。
騎士団は、さらに魔女に対する考えを硬くするだろう。

当然のことだ。

「……」

こんこん、と窓を軽く叩く音に振り返る。
見ると、そこにいたのは。

「や、どうも」
「ギィさん、どうしたんですか？」

窓を開けてギィを招きいれながら、ノウラは尋ねた。

「ちょっとね。アリオスの旦那は残業で遅くなると思うよ」

そういいながら、ギィははい、と一つの包みを差し出した。
不思議に思いながっらも受け取り、その包みを開けてみる。
開けると同時に、ふわりと甘い香り。

「ケーキ？」

もしかして、また。
ノウラが不安そうにギィの顔を見ると、気づいてギィは否定するように手を振った。

「ノウラ嬢、甘いもの好きなんでしょ？」
「はい、とても。……でも、どうして」
「今日のお礼ってとこかな」
「それは、ありがとうございます……でも、アリオスさんは甘いもの苦手ですよね」

せっかくもらったのに、アリオスはあまり喜べないものだろう。
残念だ、とノウラは困ったように笑みを浮かべる。
それを見て、ギィはああ、と言って。

「心配ないって。それ、旦那からだから」
「え」
「ああ見えて可愛い性格でしょ？自分で渡すの恥ずかしいんだよ、買いには自分で行ったくせに」

可愛らしいケーキと、可愛らしい包み。
そして、それらが売られている店内の様子。
それと、顔立ちは綺麗だが常に硬い表情を浮かべている真面目なアリオス。

思わず笑いそうになり口元を押さえたノウラを見て、ギィはにっと笑った。

「よかったね」

「……はい、すごく。帰ってきたら一緒に食べてもらいましょう」

「……ノウラ嬢もなかなかいい性格してるね」

互いに顔を見合わせて、同じ人物を思い浮かべながら、二人は笑った。

気がついたら一人でした

ゆっくりと瞳をひらく。

薄い水色があたりに広がるせいか、涼しげな空気がツンと身に染みた。

……否、寒い。

「寒っ！？」

倒れていた体を起こし、カンラは身を縮ませて腕を組む。

急に起き上がったからか、頭がぐらりと揺れた。

「う……あれ？」

薄い水色は、氷の様に透明な周囲の壁や床だと気づく。

氷ではなかったことが幸いか、寒いものの耐えられないほどではない。

きらきらとして見える光景に見とれながら、ゆっくりとカン

ラはまた体を倒し。

「……まてまてまてまて」

その背中が冷たい地面に着く前に、首を振りながらカンラは体を起こした。

「あぶねえ……」

「ちょっと、そこのあんた！！」

「！？」

大きめの声に、カンラは振り返り。

「うおえあ！？」

飛んできたナイフを、大きくのけぞってかわした。

「何！？いきなり！？危ない！！」

「そこのあんたよ！何してるかってきいてんの！」

カンラが見上げた先で、ナイフをびしっと差し向けて少女が叫んでいた。

アルマよりも小柄だろう身長に、大きなリュックを背負って。

先程飛んできたのと同じ形のナイフを、その手に幾つも持って。

「さっさと吐きなさい！！」

「ちょ、まっ……うおあああ！！？」

叫んだ悲鳴は、エコーをかけながら広がり響いた。

＊　＊　＊　＊　＊

その日。

ハロウからの直接の依頼により、カンラとアルマが訪れた場所。

”水晶迷宮”

名前の通り、まるで水晶で出来たような洞窟。

魔物がいるため頻繁には行えないが、鉱石採掘なども行なわれる場所。

そのため依頼も多く、また、ここから取れる鉱石は装飾品や武器防具にも使える。

働人にとっても関連が強い場所である。

カンラとアルマが訪れるのは、今回の仕事が始めてであったが。

「大型魔物退治か。久々だなあ」
「でもこれ、魔物の特徴が不明になってる」
「新種とかだったら、結構きついかもな」
「うん……それにしても」

アルマは周囲を見渡して、ほう、と息を吐いた。
そこは確かに岩肌の洞窟。
しかし、洞窟特有の暗さは無く、寧ろ明るいと感じるほど。

「岩盤の透明度が高いから、光が差し込みやすいんだって、アンが言ってた」
「実際見るとすごいなー」
「これが、奥の方だけ濁ってるんだっけ」

洞窟の奥深く、その場所に行くと、壁や床が黒く濁っているらしい。
そして、それに関連しているのが、今回の依頼内容である魔物。
今回の依頼の内容は、その出現した魔物退治。

「まあ、何時もどおりに行くか」

「……」
「アルマ？」
返事が返ってこないので、不思議に思いカンラはアルマを見た。
すると、こちらを見ていたのか、アルマと目が合う。
「……アルマさーん？」
「……結構寒いけど、平気なの？」
「ん？ああ！猫化の影響か。最近はもう殆ど残って無いな」
「ならいいけど」
「心配しなくても大丈夫だろ」
「そうだね、カンラは風引かないらしいし」
「……アルマさん、もう少しやさしく」
「馬鹿だから風邪ひかない」
「アルマさん！？やさしくって分かりやすくって意味じゃないよ！？」
すたすたと歩き出すアルマを、寂しげな目をしながらカンラは追いかける。
「まあ、よっぽどのことでも無い限り大丈夫だろ！」
それから数歩歩いたところであった。
突然足場に現れた大穴に落ちたのは。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「……で、気づいたらここに」
「……つまりあんたも働人なわけ？」
「そうです……あの……そろそろナイフ収めてくれませんか……」

ナイフを突きつけられた状態で、恐る恐るカンラは言う。
少女は暫く無言のまま、不満そうな視線をカンラに向けていたが。

カンラの話に納得したのか、ようやくナイフを持つ手を引っ込めた。

「こんなところで一人で寝てるから、魔物かと思ったじゃない、紛らわしいわね！」
「すみません」

もはや条件反射でカンラは謝った。
相手が気が強いのもあるのだが、口で人に勝て無いことは日々理解している。

「そっちも働人なんだな」
「そうよ、あんたと同じ依頼でね。恐らく他にもいるんじゃ

ないかしら」
「それだけ急ぎの仕事ってことか……」

今までにも魔物退治の仕事は行ってきている。
が、このように多数の働人に以来が言っているということは、それだけ被害があるということ。

早いところ仕事を進めたい。

が。

「じゃあ、落ちたときに仲間とはぐれたわけね」
「みたいだな……」

落ちる際に、カンラもアルマもあがいたことが仇となったのか、別の場所に落ちたらしい。
少なくとも近くには、アルマはいないようだった。

カンラは自分の武器を見る。
最近新調したものなので、まだしばらくは持つはずである。

カンラは、ある程度は一人でも心配ない。

しかし、アルマはそうはいかない。
もちろん、彼女が簡単にやられることは無いと思っているし、信頼もしているのだが。
それでも、魔術師と言う職業柄上、単独行動に向いていない

のも事実。

（考えろ……アルマだったら……）

アルマだったら、恐らくまずここから出ることを考えるだろう。

知ってる場所や街なら、その場で大人しくしているだろうが。ここは知らない場所であり、危険も伴う。

「で、あんたはこれからどうするの？」

「俺はとりあえず出口に向かう。もちろん仲間も探しながらだけどな」

よっ、と立ち上がりながらカンラは答える。

見ていた少女は、眉間に皺を寄せながらため息を吐いた。

「あんたみたいな奴が一人でいたら危なっかしいわ」

「……えっと」

「しょうがないから、暫く一緒に行ってあげるわよ」

髪を手で払い、少女は腕を組む。

カンラに向ける視線は厳しいものの、先程よりは弱まったようだ。

「いいのか！？」

「私も一旦補充に外に出ようと思ってたのよ。ここ、思ったよりも入り組んでるみたいだから」

「確かに、準備は万端にしといたほうがいいな」

「だから構わない。けど！あんたが連れを見つける、もしくはここから出るまでよ！」

「十分だ、助かる。俺ここ全然分からないからな」

とにかく早くアルマと合流をしなければ、依頼もこなせない。

「俺はカンラ。お前は？」

「エリノよ」

「よろしくな、エリノ」

「それじゃあさっさと行くわよ」

エリノはすたすた歩きだす。

その後ろを追って、カンラも歩き出した。

（……大丈夫だ、って、思っておくからな）

とりあえず、二人

寒いのは苦手だ。

「……考えろ」

落ち着かせるように、自分に向かってアルマは呟いた。

あたりに広がる景色は綺麗な物だが、それを楽しむほどの余裕は無い。

ただでさえ知らない場所なのに、突然穴に落ちた所為で完全に迷った。

加えて、仲間とはぐれて一人の状態。

（多少無理してでも浮遊にするんだった）

足場がなくなった瞬間、アルマは瞬時に自分とカンラに魔術を放っていた。

咄嗟のことだったので、簡単な衝撃緩和の魔術のみではあるが。

かなり高いところから落ちたものの、怪我が無いのはそのお陰だろう。

辺りを見渡しながら、耳をすませる。

しんとした、空気が広がるだけ。

働人であるのだから、こういったこともよくあること。
もちろん、自分がそんなに簡単にへこたれるわけではないことは、知っている。
しかし、前科があることもあり、一人で無茶をしてはいけないことも、知っている。

何時だって誰かが来てくれるわけではない。

（まずはここを出る、カンラは、途中で見つかったらラッキーだと思えばいい）

とにかくこの水晶迷宮を一度抜け出すこと。
カンラとの合流はそれから。
恐らくカンラも同じ考えをしているはずだ。

それに。

（カンラは、受けた仕事を放棄はしない）

アルマは、自分のことで迷惑はかけたくない。
まずは自分の身を案じよう。

目的を定めたことで、少し落ち着いたのか思考がまとまり始める。

「……よし」

まとめた思考に集中していたアルマは、自分の後ろの壁の中の影に気づくことは無かった。

「……よしっ」

魔物が気絶したのを確認して、カンラは一息ついた。

「あんた、腕はまあまあのクセに危なっかしいわね」

「……よく言われます」

先程の戦闘でカンラのスタイルを理解したのか、エリノはため息混じりに言う。

最初の様に怒っている、と言うよりは、呆れた風に。

「いつもこんな感じなわけ？」

「あー、うん、大体こんな感じ」

「そのいつもは今無いんだから、分かってるの？」

誰かと”一緒”に戦う機会が増えて。

一人で戦っていた頃とは少し変わったものの、基本カンラの戦闘スタイルは”自由”。

危なっかしいとよく言われ、自身も理解しているので、一人のときは気をつけているほうである。

「ま、でもエリノがいるしな」
「な」
「今は一応一人じゃ無いだろ」
「……し、知らないわよ、勝手にしなさい！」

にっ、と笑みを向けたカンラの顔から目をそらすように。
ぷい、とエリノはそっぽを向いた。

「……怒ってるのか？」
「うるさい！さっさと行くわよ！」

尋ねるカンラを無視して、エリノはスタスタと歩き出した。
慌ててカンラは後を追う。

「なんだよー」
「……そういえば、あんたの仲間ってどんななの？」

見つけようにも知らなければどうしようもない。
歩きながら、エリノはカンラを振り返り尋ねる。

「どんな？職は魔術師、髪は紫で、目は……」

「目は、死んでるな」
「なによそれ」
しばし考えた後にカンラが述べた言葉に、エリノは疑問符を浮かべた。

「……にしてもさ」
「何よ」
カンラ不意に口を開く。
「おかしくないか？」
「だから何が」
「さっきから結構うろうろしてるけど、誰にもあわないだろ」
「あんたの仲間も動いてたら、そう簡単には合えないと思うけど」
「じゃなくて。他にも働人がいるはずだろ」
「あ……」

カンラやアルマ、エリノ。
そして他にも、働人が依頼を受けているはず。
それなのに、これまで一人も、姿を見かけることも無く。
「……確かに、変ね。私が入ったときは姿くらい見かけたのに」
「だろ？……なんか、嫌な予感するんだよなー」
そう言って、カンラは面倒そうに表情を歪めた。
こういったときのカンは、当たって欲しくないときに限り、当たるのだ。
「つまり、私達も気をつけないと危ないってことね」
「だな」

「うわあああ！！？」
「「！！」」

反響するように聞こえたその声の方へ、ばっと顔を向ける。
道の奥は、薄暗い闇があるだけ。
「あっちだ！」
「あ、ちょっと！！」
駆け出したカンラを追う様に、エリノも走った。

走り続けると、暗闇の中に薄っすらと人影が浮かんで見えた。

「！！」

「な……」

「た！たすけ……」

働人か、もしくはここで鉱石を採掘していた作業員か。

男が、カンラたちに気づき、手を伸ばして助けを求めている。

……

体の上半身だけを、床の上に覗かせて。

「な……によ、これ……！？」

思わず呟くエリノの前で、男はさらに手を伸ばす。

しかし。

「う、うああ！！」

「！おい！？」

男の体は、まだ沈んでいた。

気づいたカンラが急いで男に駆け寄るが、男はゆっくりと見えなくなっていく。

体、顔、そして伸ばしていた腕、指先、と。

男の伸ばした手が、カンラに届くことは無かった。

ゆっくりと、沈んでいったのだ。

まるで、どろりとした沼に沈む様に。
沼と違うのは、沈んでいる場所が少しにごってはいるものの、透明であること。
そして、そこは明らかに硬い水晶壁であること。

「……くそ」

ごん、と。
既に誰もいなくなった床をカンラは確かめるように叩いた。
先程確かに、人が沈んでいった場所を。

「あんた……」
「驚いてる場合じゃなかっただろ、俺……もっと早く」
もっと早く、気づいて手を伸ばしていれば。
後悔してもどうにもなら無いが、それでも自分が腹立たしい。
カンラを見つめていたエリノだったが、決めたように口を開いた。

「……予定変更よ。あんたとはここでお別れ」
「え？」
「出口を探すより、奥に言ったほうが早いわ。私はこのまま進む」
「じゃあ別に分かれる必要ないだろ？」
「何言って……」
「俺も行く」

「何言ってんのよ、あんたは仲間を……」

「こういうときに動かない奴には、ついてきてくれないんだ。あいつは」

機嫌の悪そうな顔で、じとっとにらみつける瞳がはっきりと浮かぶ。

『何でこっちにきたの』と、ぐちぐちいわれる声がはっきり聞こえる。

思い浮かべて、笑みがこぼれた。

「というわけだ。行くか！」

「は、ちょっと！？」

戸惑うようなエリノを追い越して、カンラは奥へと進んでいった。

「……もう、変な奴！」

ため息を吐きながらも、エリノは後を追って走り出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8819u/

勇者の勇者による勇者のための

2012年1月13日18時55分発行